

---

# 沈丁花

季美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

沈丁花

### 【Nコード】

N6955S

### 【作者名】

季美

### 【あらすじ】

あきやまみちる 秋山満瑠は28歳会社員。同じ趣味が縁で交際を始めて一年になる32歳の見田祐司みたゆうじに、ある日突然レストランで別れを告げられる。満瑠は見田の事が好きだったので、ショックで落ち込む。満瑠は、ショックから立ち直るために今までと違う自分になろうと思いい、新しい二つの事に挑戦しようとする。この二つの挑戦により、満瑠は新しい出会いが始まる。

## 修行編

あきやまみちる  
秋山満瑠は午後7時、東京都内にあるシティホテルのエントランスのドアを開けてロビーに向かった。ドアを開けたら微かに沈丁花の香りがした。季節は3月に入り、そろそろ沈丁花の咲く季節になっていた。

「そうか、もうそんな季節か……彼と出会った日も、確かこの花が咲いていたっけ。」

ちよつと懐かしく思い、肩をすぼめてみた。今日も彼と会う約束をしているが、

(そろそろ結婚の話なんかが出るかもしれない。)  
そんな考えが頭をよぎったからだった。

満瑠は28歳、食品メーカーの商品企画部に所属している。大学卒業後、総合職として入社。入社7年目となってそろそろ中堅社員の仲間入りをしていると自覚している。仕事にも自信を持てるようになってきたし、社会人としても、私生活でも充実していると実感していた。

今つきあっている彼、見田祐司みたゆづしは、33歳。5歳年上の見田は、とてもしっかりしていて、几帳面なタイプの青年だ。友人の結婚式の二次会がこのホテルで行われ、その二次会で彼と出会い、二人とも写真が趣味だったことで意気投合し、すぐに交際が始まった。満瑠は、写真が趣味といっても、主に、町に出て行きかう人を撮ったり、祭りやショーの写真を撮ったりするのが好きだった。反面、見田は自然の中に入って行き、山や花などを主に撮っていた。満瑠は見田と付き合うようになって、彼に付いて行くようになり、人物よりも自然を、特に花を撮影することが多くなっていった。

このホテルは、平日ならいつも二人が待ち合わせしている場所だ。大抵、仕事が終わってからこのホテルのロビーで待ち合わせをし、映画を観たり、食事をしたりする。二人共写真が趣味なので、休日

は泊りがけで写真を撮りに行くこともあるが、平日は泊ったりはしない。このホテルは二人が出会ったホテルということもあって、待ち合わせの場所に使う事が多いのだ。

見田は、IT企業の営業をしている。営業職ということもあり、約束の時間通りに来られないこともあるが、このロビーで待ち合わせしていれば少しくらい待っても苦にならない。そういう理由もあってここを待ち合わせの場所に行っているのだった。

特に満瑠は、このホテルのロビーが好きだ。季節ごとに飾られる花が、いつも満瑠を楽しませてくれる。この人工的に活けられたフラワーアレンジも、いつも撮る自然のままの花とはまた違った趣を感じて気に入っている。

満瑠は、ロビーの隅にある椅子に座った。ここからは、沈丁花の花が良く見える。この花は、たとえ姿が見えていなくても、強い香りがその存在を主張している花だと思っている。

この数ヶ月、見田は仕事が忙しく、花の写真を撮りに行くことが出来ないでいた。だから、沈丁花の写真は、まだ二人では撮りに行った事がないのだ。

「もう、今年沈丁花を撮りに行くのは無理ね。この花を撮りに行くのは、きつと来年になっちゃうな。」

午後7時2分を過ぎた。さつき見田から電話が入って、もしかしたら遅れるかもしれないと言っていた。

満瑠は、持ってきた写真を取り出した。先週、満瑠は港区にある「お台場海浜公園」へ行き、そこで遊ぶ若者たちを写真に収めてきたので、それを彼に見てもらおうと思ったのだ。だから整理しておこうと取り出す。

ところが、すぐに見田はやって来てしまった。

「あれ、仕事大丈夫だったの？」

「そう、早く終わった。」

なんだかそっけない見田の返事だったが、あまり気にせず、

「今日は、どこに行く予定？」と聞いた。

大抵、彼がどこに行くか決めてくれる。だから、満瑠は、特に提案することも無かった。いつも見田がおごってくれるし、満瑠はしやれたお店も知らない。調べるのも面倒だったから、ずっとそうしてきた。

「このホテルの上の階のレストランを予約してある。」

このホテルは、待ち合わせにはよく使うが、レストランで食事をしたことは無いので、ちょっと意外だった。

(まさか……真剣な話かな?)

満瑠は、「結婚」という予感を少し感じながらも、なるべく顔には出さないようにして、見田の後について歩きだした。

見田は、今の会社に大学卒業後からずっと勤めていて、収入も悪い方ではない。大企業ではないが、その分転勤も無いから、もし結婚したとしても満瑠の実家から遠く離れる心配も無い。そんな思惑もあってこのまま結婚できたらいいなという思いがあった。優しく、しっかりと見田といっしょにいるのはとても楽しかったし、見田は背も高くて、どちらかというとカッコイイ部類に入っている。だから、満瑠は「友達に自慢できそう」という打算もあった。

見田は、ホテルの最上階、23階のエレベーターボタンを押した。「予約している見田です。」

受付に彼がそう言って、二人は、窓際の席に案内された。

満瑠は、今までに二人で入ったことがない雰囲気のレストランだと思った。静かな音楽が流れ、きれいなふかふかの絨毯が敷き詰められている。夜景が見える席だった。

「今日は、随分豪勢ね。何かあるの?」

見田は満瑠の問いには答えず、

「飲み物は、いつものようにワインでいい?」と聞いた。

「そうね、ワインでいいけど、今日は赤ワインじゃなくて、白ワインにしてみる。」

満瑠は明るく話しかけるのに、見田はなんだか少し思いつめたよ

うに見えた。

見田は、今日はあまり満瑠を見ていないように見える。白ワインと料理を注文し、黙って煙草を吸い始めた。

最近、彼は煙草を辞めたはずだった。

満瑠は、少しどきどきし始めた。

見田は、初めて満瑠の顔を見て話しかけた。

「先週、お台場の写真を撮ったんだってね。」

案外、普通の会話だったので少しがっかりしたが、

「そう、見てくれる？」

満瑠は、持ってきた写真を、ドサッとテーブルに置いた。

「満瑠は、相変わらず豪快だね。ファイルに綴じるとか、良くできたのとそうでないのを分けるとか、整理してから見せるっていう事できないの？」

「ごめん、さつきやろうと思ってたのよ、ロビーでも、祐司さんが案外早く来ちゃったからできなかったの。いいじゃない、堅苦しいこと言わないで。」

見田は、結構細かい人だと満瑠は前から思っていた。満瑠のぞんざいな態度や、乱暴なしぐさに対して、時々見田は責める。

そんな時満瑠は、「祐司さんは、大和撫子みたいな女性が好み？  
そんな女性、今時少ないわ。」といって相手にしなかったのだっ  
た。

今日も、見田の言葉を満瑠は、一笑に付していた。

見田は、そんな満瑠を苦笑しながらやりすごし、写真にさっと目を通すと、

「これなんかいいね。」と言って一枚を差し出した。

その写真は、満瑠も自信があった写真だ。少し陽が傾いた海に向か  
かって、逆光で男女を写した写真だが、男女が手をつないだシルエ  
ットが浮き出ている。女性が男性の方を見ていた。出来あがった写  
真を見て、満瑠は、「この二人はきつと幸せなのね」と感じていた。  
「この写真、いいね。哀愁が漂っている。」

意外な言葉が見田の口からでてきた。

「えっ？ 哀愁って？」

満瑠は面喰った。

「これは、どう見ても幸福感でしょ？ この二人は、絶対に幸せだわ。」

「そんな風に見えるの？」

見田は、ワインをぐいっと飲みほした。

満瑠は、何を思っで見田がそんな事を言っているのかよくわからなかった。でも折角楽しく食事をしているのに、これ以上何か言っで喧嘩をしても仕方がないと思ったので、運ばれてきた食事に手をつけ始めた。

「ねえ、今日は遅れそうだって言っていた割にはちゃんと来てくれたけど、仕事、大丈夫だったの？」

満瑠は、話題を変えることにした。

「ああ、客先でもめそうだったけれど、明日にしてもらって急いで来たんだ。」

満瑠は、客先でもめたのに明日に延ばしてでも自分のために急いで来ようと思ったと聞いて、ちょっと嬉しくなった。

（やっぱり今日は、何か重要な話をしようとしているのね、きっと）

満瑠は、何かを話そうとしている見田の言葉を待つことにして、静かに食事をすすめた。

特に会話らしい会話をしないまま、デザートを終えた。見田は、確実に何かを話そうとしている様子だったが、食事が終わるまでは話を始めるつもりはないようだったので、満瑠も特には聞かなかつた。

デザート後のコーヒーを飲みながら、見田は静かに、でもしっかりした口調で言った。

「僕たち、別れないか。」

満瑠は、言葉を失った。自分の耳を疑った。

「何？」

この一言を言うのが精いっぱいだった。

「ずっと考えていたんだ。どうしても君とはこの先一緒にやっ  
ていく自信がない。」

「私の事、嫌いになったの？ 何か私、悪い事をした？」

「嫌いというのとは違う。でも、一緒にいると辛いんだ。」

満瑠は、興奮してきた。少し怒りが混じった感覚が湧き上がっ  
てきた。

「どういう事？ 意味がわからないわ。」

「説明するのが難しい。今までどうやって説明しようかとずっと迷  
っていた。きちんと説明しようと思っ  
て来たけれど、やっぱりうま  
くは説明できないと思う。でも、一緒にやっ  
ていく自信がないと思  
ったから……」

「ちよつと待つて、難しいなんて言っ  
て誤魔化さないで！ きちん  
と説明してくれなければ納得できないわ。」

満瑠は少し声を高めて、強い口調で言った。

満瑠は、見田と一緒に居る時間はとても楽しかったし、幸せを感  
じていた。それなのに、この人はその時間は苦痛だったと言っ  
てい  
るのだろうか？

「信じられない。どうしてそんな話になるの？ 一体、いつからそ  
う感じていたの？」

「いつからなのか、はっきりはしていない。でも、満瑠の事がわか  
らなくなってきた。心がつながっていないのではないかと思うよう  
になっ  
て来たんだ。」

「心がつながっていない？ 益々、意味がわからないわ。私は、ず  
っと気持がつながっていたと感じていたのに。どうしてそんな風  
に感  
じたの？」

「君も少しは感じていたかもしれないと思っ  
ていたけれど、やっぱ  
り、僕だけがこんな風に思っ  
ていたみたいだ。」

「とにかく、納得できない。2か月前だっ  
て、一緒に写真を撮りに



……冬の海を撮りに言ったじゃない。あの時も、そう思っていたの？ 私はそんな事、全然感じなかった。不満があったら、その時に言ってくれればいいじゃない。どうして、後になってこんな風にひどい言い方するの？」

「満瑠は、僕の事、見ていない気がする。」

「見ていないって？ どういう事？」

「僕の事、僕の満瑠への気持も……見ているようで全然見てくれない。……そう感じるんだ。」

満瑠は、益々わからなくなってきた。見田の気持を見ていないと言われても思い当たる節がなかったし、そんなことで、見田が悩んでいるなんて思ってもいなかったからだ。

「もしかして、他に好きな人ができたんじゃない？ だから、都合のいいこと言って……。私をだましているんじゃないの？ それならそうと言ってよ。」

「違うよ。それだけは違うよ。本当に、そうじゃないんだ。」

満瑠は悲しかったけれど、涙も出なかった。夢を見ているみたいだった。

ほら、もうすぐ夢が覚めて「なあんだ、びっくりした」っていうことになるんだわ。そうに違いない……。

満瑠は、朝になる感覚が訪れてくるのを待ってもみた……が、駄目だった。

満瑠はもっと、もっと、見田に聞きたい事や言いたいことがたくさんあった。でも、少し我に返って周りを見てみた。

ここは、静かな高級フランス料理のお店。そのコース料理を終えているところ。ここで満瑠が騒いだり、取り乱したりするのは、プライドが許さなかった。更に、見田が話す言葉がなくなって満瑠を置いて立ち上がり、自分が取り残されてしまうという状況は、もっとみじめ過ぎると思った。いえ、見田はやさしい人だから、きっと満瑠を置き去りにはしないだろう。でも、冷え切った彼の心を知ってしまった満瑠にとって、もう気持ちが自分に向いていないと分か

った彼といっしょに歩くことも、つらいに違いなかった。

見田が満瑠をじっと見ている。

満瑠は、その見田の目を見て思った。

「わかったわ。別れる気持ちを変える事はないみたいね。」

満瑠は、静かに立ち上がった。

「帰るわ。」

見田は、黙って、まっすぐ前を向いているだけだった。

満瑠は、両親と一緒に暮らしている。満瑠は、自分でカギを開けて玄関に入り、母が声をかけているのにも気がつかず、自分の部屋へまっすぐ入って行った。

満瑠はどうやって家に帰ったのか、自宅にいる家族とどんな顔で接したのか、全く覚えていなかった。

気がつくと、部屋のベッドの上で天井を見ていた。彼と結婚したら、こんな暮らしになるのかな？ というような想像はたくさんしたけれど、まさか振られてしまうという想像は、一度もした事なかった。

満瑠の母、昌枝は、いつもと違う満瑠の態度に、どう接していいものかと思った。

満瑠は小さい時から、明るい性格で、どちらかというところがあるのでは、隠し事などはしたことがなく、何でも自分に話してくれていた。だから、今日のように何も言わず部屋に入ってしまった満瑠に、どう接したらいいものかと落ち着かない気持ちになっただけだが、今自分が話しかけるのはタイミングが悪い気がした。昌枝は少し様子を見ることにした。

「僕の事を見ていない。」

満瑠にとっては、ゆっくり考えてみてわからない見田の言葉だった。

彼との結婚はもう無くなってしまった。彼の事はとても好きだっ

た。愛していた。失いたくない人だと思っていた。……そう、失いたくなかった。

彼はやさしかった。素敵だった。満瑠に色々な事を教えてくれた。花を撮る楽しさも教えてくれたし、一緒にいてとても楽しかった。

満瑠は、ベッドの脇に二人で撮った写真を飾っていた。二人で撮影旅行に行った時に撮った写真だ。彼は笑っている。楽しそうに笑っている。

「この笑顔は、本心じゃなかったの？」

満瑠は、益々わからなくなってしまった。今まで悲しいと感じる余裕がなかったが、じわじわと悲しみが押し寄せてきた。

涙が頬を伝っていった。どんどん落ちて行く。止まらなかった。

満瑠は落ちる涙をそのままにして、動かなかった。

「僕の事を見ていない」ってどういう事？」

何度もつぶやいてみた。

満瑠には若林杏子わかばやしあんずという親友がいる。高校時代の友達で、大学進学から進路は分かれてしまったけれど、家も近所だったのでずっと親しくしている。月に一度くらいは時間をとって、お互いの近況や会社のグチなどを話したりしていた。

勿論、見田との事も、付き合い始めた時からずっと杏子に相談していたので、馴れ初めから旅行に行った時の事なども、詳細に知っている。

満瑠はこの事を、とにかく杏子に聞いてもらいたかった。

（杏子ならどう思うだろう？）

こんな訳のわからない理由で満瑠が振られた事を杏子ならどう思うだろうかと考えてみた。

杏子は高校の時から、学業の成績が良かった。大学も満瑠よりも随分と上のランクの大学に合格していた。就職も大手銀行に入行し、今は男性たちを差し置いてバリバリと活躍している。そんな彼女なら相談したら何かわかるかもしれない。

早速、携帯電話でメールを送った。

『ヘルプ！ 明日、会って！』

そんな文章だったので、杏子はびっくりしたようで、すぐに携帯電話が鳴った。

「一体、どうしたのよ。」

「杏子？ 電話くれたんだ。」

「だって、変なメールだったから……。普段の満瑠らしくないから。」

「わかる？ そうなの、ヘルプなのよ。」

杏子の声が聞けて、満瑠は、少し気持ちが落ち着いた。

「仕事の事？ 彼の事？」

「彼の事。祐司さんの事よ。明日、会えない？ 時間、作って！」

今、ここで振られた事は言わないことにした。今はあの場面を思い出したくなかった。

「随分、切羽詰まっているようね。いいわ、会いましょう。なるべく早く仕事を終わらせるようにするわ。」

「ありがとう、やっぱり持つべきものは、『友』ね。」

満瑠は本当にうれしかった。このまま眠れないかもしれないと思っていた。でも、明日杏子に会えると思っただけで「希望」が見えたような気がした。

とにかく、もう寝ようと思った。わからないことは考えない事にしたのだが、ひとつ気になった。

「祐司さんは私を取り乱したりしないように、二人の最後の日の食事をわざとあそこに決めたのかしら？」

考えてみたが、答えは出なかった。

満瑠は社会人としても自信を持ってきただけに、今回の事で仕事までうまくいかなくなるのではないか、という不安も襲ってきた。

「とにかく、杏子に相談しよう。」

満瑠は杏子と電話で話したことで少し落ち着いたので、家族にも一度顔を出し、おやすみなさいと声をかけ、素早く身支度をして眠

りに着いた。

昌枝は、思ったより穏やかな顔で、おやすみを言いに来た満瑠に安堵した。

(今日は見田さんと会ったのだから、見田さんと何かあったのね。)  
もう大人の満瑠には自分から話すまで聞かない方がいいと考え、昌枝は、満瑠をそつとしておくことにした。

翌日仕事の帰りに、満瑠はいつも杏子と落ち合う喫茶店で待ち合わせをした。

仕事がいつも忙しい杏子は、やはり少し遅れてきた。それでも、満瑠の普通じゃなさそうな電話があった後だったから、杏子は急いで飛び込んできてくれた。

「ごめん、満瑠、待った？」

「ううん、忙しいのに無理言つてごめんね。」

「ここじゃ話にくいでしょうから、場所を変える？」

二人は、少し落ち着いた雰囲気のある京都風パブへ行くことにした。居酒屋みたいに騒がしいところは避けたかった。ここは、杏子と何度か行った事がある店だ。

店に着くなり、急いで生ビールとおばんざいを数品注文した。

この店は京都風を売り物にし、店は広く、個室もあった。個室でなくても四人席ごとに仕切りがあり、隣の席の人の顔が見えないようになっていいる。声もあまり聞こえない。だから二人は、込み入った話があるときは、何回か利用していた。

「彼と何があったの？」

杏子は、最初のビールを一口飲むなり、早速聞いた。

「実は、振られちゃった。」

満瑠は、なるべく、あつさりと言おうとしてみた。ぐちぐちと言うのは、なんだかみじめで嫌だった。

「……やっぱりそういう話か。」

意外に杏子は、驚いていないように見えた。

「そう、いきなり、別れないか、って言われたのよ。どう思う？」  
あつさり言おうと思っていたが、やっぱり、だんだん興奮してきた。

「満瑠には心当たりないの？」

「無いわよ。私、実は、結婚の話でもするのかと思っただのよ。昨日は、洒落たレストランなんて予約したりしたから。それが、とんでもないわ、別れようだなんて。」

「理由は聞かなかったの？」

「勿論聞いたわ。でも、意味がわからなくて……。僕を見ていない。それだけなのよ。ちつとも意味がわからない。」

「わからないなら、どうしてもっと、教えてって言わなかったの？」

「なんだか、静かなレストランだし、カツとして取り乱したりしなくなかったから……。」

「それ、変じゃない？ 見田さんの事好きなんですよ？ 取り乱して当然じゃない。普通は取り乱すわよ。どうしてそんなこと気にするの？」

「言われてみればそうね。でも、その時は、そう思って、それ以上は聞かなかった。」

「それで、どうしたの？」

「彼を置いて、一人で帰ってきた。」

「まあ、満瑠らしいといえば満瑠らしい行動だけど、そんな終わり方でいいの？」

「何だかしっくりしないけど、もう彼は終わりにしたいって言うから。きつねにつままれた感じだけど、振られたって事ですよ。理由が理解できないけど……。」

杏子は満瑠の言葉を聞きながら、何かを考えているようだった。

このお店お勧めの京都風おでんをつまみながら、二人はすでにビールを飲み終わり、日本酒に変わっていた。

「満瑠が振られたの、初めてだね。」

「そういえば、そうかな？」

満瑠は、今まで何人かの男性と付き合ってきたが、いつも満瑠から別れを告げていた。

「満瑠は結構、モテるからね。自分でも自覚しているんですよ。」  
「さあ？ そんなことはないよ。」

満瑠は、否定はしたものの、心の中では肯定していた。

「勉強もそんなにできなかったし、特に何が出来たっていうわけではないのに、何だかボーイフレンドがどんどん出来ちゃうんだよね。満瑠みたいなのは、キュートっていうのかな。お得よね。」

満瑠に比べると、勉強も出来たし、仕事もバリバリできる杏子のほうが、昔からモテなかった。勉強ができるばかりでなく、杏子はどちらかというと美人だ。それなのにだ。

そんな杏子は、でも取り立ててあせる様子もなく、マイペースに勉強や仕事に専念していた。そんな勉強も仕事もできる杏子が満瑠には少し羨ましくもあったから、自分がモテる事はちよつと自慢したい部分でもあった。

「私、振られるほどダメ女かなあ。」

満瑠はお酒がまわってきて、段々、うっぶんを晴らしくなってきたので、わざと思ってもいないことを言ってみた。

「そんなことはないよ。満瑠はかわいいし、明るいし、人を楽しませられるし、いっしょにいて楽しい。見田さんがどうして満瑠を振ったのか、私もわからないよ。」

「……でしょう？ ホント、わからない。振った事、後悔したって知らないから……」

満瑠は、段々、声のトーンが上がっていき、お酒のピッチも上がっていった。

「私、彼の誕生日には、がんばって手作りのキーホルダーなんか作ってあげたのよ。」

満瑠は、銀細工を少し習ったことがあり、イニシャル入りのキーホルダーを作ってプレゼントをしたのだ。

「彼、とっても喜んでいたわ。あれは嘘だったの？ 返してよ。」

「満瑠、ちよつと、ペース速くない？」

杏子は心配そうに満瑠を覗き込み、お店の店員にお冷を持ってきてもらった。お冷を満瑠に飲ませながら、静かな声でつぶやくように言った。

「でもさ、満瑠、見田さんの事心の底から好きだった？ 結婚したい程好きだった？」

「何？」

あまりお酒に強くない満瑠は、一気に日本酒を二合も飲んでしまったので、急に頭がくらくらしてしまい、杏子の声もぼんやりかすんで聞こえた。そのためか、言っている意味も良く分からなかった。だから、結婚の話がでると思って期待していたって言ったでしょ。好きだったわよ。」

「そうか……わかった、ごめん、変な事言つて。」

「そうよ、人が生まれて初めて振られて悲しんでいるときに……ひどいよ。」

「ほんと、ごめん。ただ、これでいいのかなと思って。もう満瑠からは見田さんに連絡しないの？」

「私からはしないわよ。振られたのにすがりつくなんて……。」

「……そう、わかった。今日は満瑠をなくさめる会を開催！ 今夜はずつと付き合つよ。」

杏子は優しかった。

満瑠は、いつも杏子のこの優しさに支えられてきた。

(いつもそう、私が仕事で失敗して悩んでいたときも、こつやつて夜中まで付き合ってくれたっけ……。でも、私が杏子に付き合った事、あつたかな？)

満瑠はぼんやりと考えながら、今日は徹底的に飲もうと思った。そして、また日本酒を追加注文していた。

満瑠は朝、目覚まし時計がけたたましく鳴っているのに気づき、時計をひっぱたくようにして音を止めた。止めるまでに相当の時間



がかかったようだと思付いた。目覚ましの音は3段階になっていて、すぐに止めないと段階的に音が大きく、早くなる仕組みなのだ。

時刻は、午前6時半。満瑠はゆっくり起き上った。そんなに二日酔いの症状はなかったが、昨日は杏子に悪態をついてしまったのを思い出した。

「昨日は、杏子に悪い事をしたな。」

昨晩は、店が閉店になる夜中の12時まで付き合ってもらい、タクシーで家に帰ってきた。京都風パブでの話の内容は、具体的にはよく覚えていないが、きつと見田の悪口を言ったり、どうしても自分が振られなきゃいけないの？ というようなことを愚痴っていたに違いない。

昨日は何とか会社に行ったが、振られたショックで精神的に参っているのが自分でもよくわかった。とても仕事をする気分ではなかった。

どうしても自分がやらなければならない事は今日は無さそうだったので、会社を休むことにした。目覚ましをもう一度8時に合わせて寝ることにする。風邪をひいたということにしよう、と思いがながら……。

もう一度目が覚める時、夢を見た。

見田が満瑠の前にいた。見田は笑っていた。満瑠を見て笑っていた。その笑顔に吸い込まれそうになったところで、目が覚めた。

「もう見られない笑顔なの？ 夢にまで出てきて私を苦しめるなんて、ひどいよ、祐司さん……。」

満瑠は会社に、休むと電話をいれてリビングに降りて行った。また祐司さんの夢を見たらたまらないと思ったから、もう一度寝る事はやめたのだ。

昌枝は昨晚の満瑠の帰宅の様子から、きつと今日は会社を休むだろうと予想していた。だから、部屋に起こしにも行かなかった。

「ごはん食べる？」

昌枝は、なるべく平静を装って聞いた。

「果物か何かある？　あまり食べたくない。」

いつも朝に必ず飲んでるコーヒーマも、今は飲みたくなかった。二日酔いというほどではないが、少し胃がむかむかしていた。胸につかえるような感覚もあった。満瑠はパジャマのまま顔も洗わず、髪の毛もくしゃくしゃのまま席についた。顔には表情が無かった。

昌枝は、りんごをむいて満瑠に差し出した。コーヒーマはどうするか聞こうかと思ったがやめた。こんなに落ち込んだ満瑠を見たのは久しぶりだと思った。

（やはり、見田さんと何かあったのね。）

昌枝は、そう言おうとしたが、やっぱり言わないでおく事にした。どう見ても、そうに違いないから、自分から言い出すまで待とうと思った。

満瑠は一人っ子だからつい甘やかしたり、先まわりをして心配したり、手助けをしたりして育ててしまったと昌枝は育て方について反省している。だから自分で解決する力が大人になっても備わっていないのではないかと、未だに心配をしているのだ。

（今回は、じっと見守ってみよう。）

昌枝は、心の中で決めた。きちんと決めないと昌枝は、つい、色々と手を焼いてしまいそうで怖かった。昌枝から見ると満瑠は、28歳にしては、色々な面でしっかりしていないところがあるから心配なのだ。今回は、満瑠が成長するのにいい機会だと思った。

満瑠は昌枝に出されたりんごを食べた後、どうしようか迷った。布団に入って静かにしていたい気分だが、もしかた寝てしまったら見田の夢を見てしまうかもしれない。そう思うと、布団に入るのが怖かった。

満瑠は昌枝が自分に何も聞いてこない事を、ちょっと不思議に思ったが、ほっとしていた。今は、見田のことを誰にも話したくなかった。振られたという事実を話すのはみじめで嫌だったし、あの光景を思い出したくもなかった。でも、ずっと家にいたら昌枝が何か聞いてくるかもしれないと思った。今まで満瑠は、昌枝には何で

も話してきたし、昌枝はどちらかかかという事細かに満瑠の行動にチエックを入れている親だと思っていたからだ。

満瑠は、出かけることにした。少し身体が重かったが、外に出たら少しは気が晴れるのではないかと思っただからだ。部屋に戻ってゆっくり身支度をして玄関を出てみたが、

(行く先も決めないで外に出るっていうのは、不安定なものね。)  
今までそんな事をしたことがない自分に気がついた。

(どこに行こう。)

満瑠はとりあえず、駅に向かってみた。

(行き先が決まっていなないと、歩くスピードがこんなに遅いものなのね。)

早く行き先を決めないと駅についてしまう……と思いつつ、あせって考えてみたが、なかなか決まらない。ゆっくり歩いているのに、意に反してすぐに駅に着いてしまった。ゆっくり歩いたというのに、駅までの景色を全然見ていなかった。急いでいる時の方がもう少し周りを観察したり、季節を感じたりしているのに違いない。

(困ったな。とりあえず、電車に乗ろう。)

電車に乗って、席が空いていたので座ったが、さて、これからどうしたものかと思った。

(定年退職したサラリーマンの気持ちってこんな風?)

そうじゃないだろう。わからないけれど、こんなに重くはないと思っただ。

(今、私は何をしたいのだろうか? こんな時、普通は、映画を見たりするのだろうか?)

満瑠は自問自答を始めた。

でも、どんな? 悲しい映画?

いえ、もっと悲しくなるじゃない。

ハッピーエンド?

それももっと嫌。自分がみじめになる。

こんな自分を変えたい。

それじゃ、いつもと違う事をしよう。

違う事って？

満瑠が自問自答しながら出した結論は、「違う自分になりたい」という事だった。

今と違う自分に……。

やった事がない経験を試してみたらどう？ と自分に問いかけてみた。

例えば「ひとりでレストランに入って、コース料理を食べる」事は？

普通は好んでやらないと思うが、この際やってみようかと思った。ディナーではなく、ランチコースならハードルは低いと考えた。

次に満瑠は、電車をどの駅で降りようか迷ったが、これも降りたことがない駅に降りることにした。満瑠が住んでいる駅は京王線沿線の駅で、今、新宿に向かっている。あまり小さな駅では、コース料理を扱うお店が無いかもしれないから、新宿より先に行くことに決めた。満瑠の勤務先は、新宿にあるから、その先にしようと思った。

新宿で電車を降り、山手線に乗り換える。駅名が書いてある表示板を見ていたら、「恵比寿」には降りたことが無いことに気がついた。

「恵比寿にしよう。」

満瑠は、少し元気がでてきた。行き先が決まったからかもしれない。

山手線の恵比寿駅で電車を降りた。この駅は、なぜか今まで縁がなかった。仕事でもプライベートでも降りたことが無い駅だった。電車で素通りするだけの駅だったので、この駅で下車する事にわくわくしてきた。

駅を降りてからは、あまり考えないで歩く事にした。最初は、にぎやかな通りを目指して歩き出したが、たくさんの人を見ているうちに、ちよつと尻込みしてしまった。

「たくさんの中で私、ひとりぼっちなのね。」

今までは一人で歩いていても寂しいなんていう思いは感じたことが無かったが、今日はやけに寂しさが身にしみる。

考えてみると、一人では喫茶店くらいしか入ったことがなかった。それなのにいきなりレストランでコース料理を食べようとしている。しかも、こんな寂しい気持ちの時に……。

満瑠の足は、自然と人通りが少ない静かな道を選び始めた。

「恵比寿にこんな静かな通りもあるのね。」

満瑠は勝手に恵比寿が華やかな街だと思っていたが、今歩いている道は予想外に静かだったので、少しほっとしてもいた。

気持ちが落ち着くとさつきまで感じていなかったが、3月になったせいかな寒さがやわらいできたのだと気がついた。陽の光も強く明るくなってきたような気もする。

時計を見るとまだ10時半過ぎだった。ランチタイムには時間があるので、まだ店も開いていないだろう。少し公園で過ごすことにした。目にとまった公園に入ると、ブランコに腰を下ろした。

(ブランコに乗るなんて何年ぶりだろう?)

平日の今の時間、公園には誰もいない。

(都会だから小さな子供が少ないのね。)

ブランコをギイギイと揺らしながら、何も考えないですつとこうしていたいと思った。

満瑠は、しばらくぼうつとしながらブランコを揺らしていた。公園にある何の木だかわからないが、葉が全部落ちてしまっている木をずっと見つめながら……。

公園のブランコから見えるところに一軒のお店が見える。フランスの国旗が飾られているので、フランス料理店だろうと思われる。

先ほどから、開店の準備をしている姿が目に入っていた。外から見た感じでは、そんなに高級そうでもない店に思えたので、満瑠はここなら気軽に入れそうな気がした。時計を見ると11時を少し過ぎている。

そろそろ開店時間かな？　と思い、店の方に近づいてみた。

入口のドアは木製で出来ていて、フランスの郊外にある家庭的なレストランを思わせる雰囲気だった。満瑠はフランスに行った事がある訳ではないが、そんな気がした。そのお陰で、あまり緊張することもなく、ドアを開けることができた。

「いらつしやいませ。」

すぐに、清楚な雰囲気男性が満瑠を迎えた。入口を少し入ると店の中を見渡すことができた。外観の雰囲気とは少し違い、ピカピカのワイングラスや食器が並んだテーブルが20席ほど見えた。そして、壁には品のある絵が飾られていた。

（あれ？　ここ、まさか、高級レストラン？）

身体が硬直したような気がした。

「ご予約の方ですか？」

満瑠を迎えた男性が、とびきりの笑顔で聞いてきた。

「予約もしていないし、ひとりなんです。それでもいいですか？」

満瑠は顔から火が出そうな気分だったが、もじもじするのは、みっともないと思ったので、躊躇せずに早口で答えた。

「構いません。どうぞ。」

とびきりの笑顔の男性が、中へ招き入れた。

店には、まだ誰も入っていないかった。開店したばかりだから当然だろう。

これからどんどん予約客が来るのかな、と思ったが、今日が平日だと言う事に満瑠は少し経ってから気付いた。いつも見田とランチで入るレストランは込み合っているのが常だったが、それはいつも休日だったからに違いなかった。

店員は、満瑠を窓際の二人掛けの席へ案内した。満瑠の荷物を預かり、席ではきちんと椅子を引いてくれた。

窓からの景色はただの静かな路地だったが、店の中は高級感漂う壁紙、そこに飾られた花が目映る。高いハードルを越えようとしているのね、と覚悟を決めなければならなかった。

メニューを見せてもらってまた驚いた。料理はコース料理しかなく、一番安いコース料理がランチだというのに5,800円から始まる。次に、7,000円、10,000円と続く。そして、メニューに挟まった紙には、「キャビア追加50グラム、2,500円」と書いてあった。

(これは、思った以上に本格的なお店だったわ。)

とあせりもしたが、もうどこまでも行ってみようと思った。今日は違う私になると決めたのだから。

クレジットカードは持ってきていたのでお金の心配はなかった。

満瑠は店員に、7,000円のコース料理を注文し、食前酒にスパークリングワインを頼んだ。今、いつも見田と飲んでいたワインは口にしたくなかった。

満瑠は、自分の服装を改めて見る。普段着に毛の生えた感じで、この店にはそぐわないかもしれないと思った。それでも気後れしそうになる自分を奮いたたせ、最後までひとりでフルコースを堪能してみることを決心した。これができたら、自分を変えられそうな気がした。

するとその時、若い男性が一人で店に入ってきた。店で待ち合わせをしている様子で、予約をしていると告げていた。

その男性は満瑠の隣の席についた。年齢は満瑠と同じくらいだろう。きちんとスーツを着ていたし、平日の昼間だから、仕事の打ち合わせか接待かもしれないと満瑠は思った。

しかし、満瑠のテーブルにオードブルが2品運ばれてきても、男性の席に連れの人はやって来なかった。

満瑠は、隣の男性の事が気になりながらも、そのオードブルの品の良い盛り付けや味を堪能していた。

(そう言えば今日は、初めての食事だった。)と急に気がついた。昨日、飲みすぎたとはいえ、そろそろ食欲も出て来たようだった。

満瑠のテーブルを担当している店員はとても感じが良く、満瑠にさりげない気配りをしてくれた。バックを取りたいと思い椅子から

立ち上がれば、すぐにやってきてくれる。笑顔も素敵で、満瑠はこの店員に少し話しかけてみたくなった。

「私、今日、初めて一人だけで食事をするんです。しかも、コース料理を。私にとっては、修行なんです。」

こんな満瑠の独り言のような言葉を、店員は、静かにうなずいて聞いてくれた。だから、つい、もう少し先の話してみたくなくなった。

「私、振られちゃったんです。だから、今日から変わりたいと思って。」

言ってしまったから、言わなければよかったと後悔したが、それも修行だな、と思う事にした。店員はやさしく頷いてくれただけだった。

また、隣の席の男性を見てみた。相変わらず、前を見たまま静かに座っている。満瑠の会話を聞いていたのかどうかはわからない。

店員があちらに行ってしまった時、その隣の男性の携帯電話が震えた。メールが入ったようだ。メールを見て男性は、がっかりした様子で携帯電話をポケットにしまった。

満瑠は、約束の相手からのキャンセルのメールだなと思った。

「かわいそうな『おひとり様』が2組か……。」「最近、独身女性のような一人だけで行動をする女性の事をこう呼んでいるのを思い出した。」

その男性は手帳を取り出し、何かを書きだした。そして、それをやぶって小さくたたむ。たたみ終わると満瑠の方を見て、満瑠のテーブルに「ポン」と置いた。

「えっ？」

男性の意外な行動に満瑠はびっくりした。男性はメモをよこすと、又前を向いてしまったのだ。

満瑠は、どうしようかと思ったが、自分に宛てた手紙のようなので開けてみた。

「ご一緒していただけませんか？ 私も振られたんです。」と書いてあった。



やっぱりこちらの会話を聞いていたんだと思うと少し腹だたしかつたし、折角自分に修行を課して変わろうとしているのに、途中で止めたくなかった。

満瑠は、そのメモの裏にペンを取り出してこう書いた。

「私、修行中なんです。」

隣の男性と同じように折りたたんだメモをテーブルに「ポン」と投げた。

隣の男性はメモを読むと、少しプツと吹き出してから少し笑顔を見せて満瑠を見た。

「わかりました。私も修行を積みます。」

そう小さな声でささやき、店員を呼ぶと満瑠と同じコースを注文した。

隣同士で、お互いに一人きり同士で同じコースを食べ始めた。少し満瑠の方が先に食べ始めたのに、すぐに追いついて二人にメインディッシュが運ばれた。

メインディッシュの魚のお皿はパイに包まれていて、魚料理とは思えなかった。そしてまわりにきのこや綺麗な色の野菜に彩られ、まるでお皿に描かれた絵画のようだった。

大抵、こんなコース料理は友達や彼と食べていたから、こんなにじっくりと料理を観察したことが無かったと、満瑠は改めて思った。味だけでなく、色や形にこんなにも気を使って盛りつけているのかとつくづく感心した。

こうしてフランス料理のコースを食べていると、振られた日のシーンが蘇りそうになる。もう一度こうやってコース料理をひとりで食べる事で、振られた事をパソコンのデータを上書きでもするようになればいいのに、と満瑠は思った。

ゆっくりと味を堪能し、絵画のような飾り付けを崩しながら食事を進める。相変わらず店員は細やかな気遣いで、水を足したりお皿を変えたりと忙しいが、静かに自然に動いていた。

食事がすすむにつれて客の人数も増え、少しにぎやかになった。

勿論、他のテーブルは数人で来ていて、満瑠たちのように一人で前を向きながら黙々と食事をしている客はいない。平日のランチだから、専業主婦とみられる女性同士の客が多かった。

隣の男性は、背がすらつと高く姿勢も良いので、後ろ姿だけ見たら映画俳優に見えるかもしれないと思った。

彼は満瑠の食事の進み方にピタツと合わせ、まるで一緒に食事をしているかのようなだった。料理に対する感じ方が同じかもしれないと思うくらい、同じものを食べた時の反応が似ていた。一緒に思わずうなずいたりする場面もあった。

(折角なら、一緒に食べれば良かったかな?)

少し満瑠は後悔しだした。そこで、満瑠はメモを取り出し、『もう、修行を終わりにしたい。』と書いて、隣のテーブルに、ポン、と置いた。

彼はメモを広げ、読み終わるとすぐに店員を呼んだ。コース料理は終盤を迎え、デザートを残すのみとなっていた。

「今まで修行中だったのだが、許しが出たので、隣の女性と同じテーブルに移らせて下さい。」

変な申し出の仕方だったが、満瑠が笑顔でうなずいたのを見て、店員は満瑠のテーブルの椅子を引いて案内した。

「僕は、安田誠治せいじと言います。28歳です。ご一緒できてうれしいです。」

彼は見田と違い、大人しい話し方に聞こえたが、物おじしているようには見えなかった。厚かましくもなく、謙虚すぎもせず、満瑠はとても好感が持てた。修行のつもりで始めたコース料理の一人食事に、段々嫌気がさしてきたので救われた気がした。

「こんなお店でこんな修行をするなんて、あなたは、随分悲しい目に遭ったんですね。」

「こんなお店って?」

「この店は、とても有名なオーナーシェフのお店です。フラット一人で入るようなお店とは違うんですよ。僕だって、彼女に振られない

かったら、一人で入ったりしませんよ。」

安田の言葉を聞いて、満瑠は、もしかしたら、と思っていたことが本当だったので、

「やっぱり私、かなり厳しい修行をしようとしていたんですね。」  
と言って笑った。

デザートもかなり芸術性が高かった。小さなケーキやお菓子が、いくつもきれいに皿に並んでいた。どれも、手がかかるデコレーションで飾られたり、精密に描かれていたりしている。

「こんなに素敵な作品を、誉めたたえ合いながら食べないなんてもつたいないです。」

安田は、満瑠に笑顔で見つめながら言った。

満瑠も、もつともだと思ったので笑い返す。

「私は、秋山満瑠です。今日は、人生を変える日にしようと思っていました。あなたに出会って、本当に変わるかもしれません。」

まだ出会ったばかりの男性に対して、ちょっと言いすぎたかもしれないと思っただが、絶望的だった満瑠にとって、この男性の出現は、それほど有難いものを感じていた。

「安田さんは、今日、彼女に振られたんですか？」

満瑠は、聞いてから、慌てて

「ごめんなさい、話したくないならいいです。」と付け加えた。

「いえ、僕も、今日から変わりたいから、修行のひとつと思ってお話しますよ。」

安田は、そう言って、少し目をそらしながら、簡単に振られた経緯を話し始めた。

それによると、一年以上付き合った彼女と喧嘩をして、お互い譲らなかつた。何日も口を聞かなかつたが『仲直りをしたいのでこの店で会おう。』と彼はメールをした。この店は、二人の思い出のレストランだったそうだ。もしかしたら来ないかもしれない彼女をじっと待っていたという訳だった。

「喧嘩の原因は何？」

「何だったかな？ 大した理由じゃなかったと思う。……いや、そう思ったのは僕だけで彼女にとっては大事な事だったのかもしれない。」

安田は、考え込むようなしぐさをした。

満瑠はそれを見て、もしかしたら自分も見田に対して同じ事をしていたのだろうかという考えが少し頭をよぎった。

デザートとコーヒーを終えると、安田は勘定はすべて自分が払うと言いだした。

でも満瑠は、それを丁寧に断った。

「自分で払わなかったら修行にならないから。」

「そうだね。」

安田もすぐに納得して、別々の支払いにしてもらった。

店を出ると、二人は、さてこれからどうしようかと立ち止まった。今の二人の関係は、ただの修行中の二人が、たまたま居合わせただけの関係だったから。

「修行なんて大そうな事言いながら、途中で修行を放り出して二人で食事をしてしまうなんて、だらしない二人だわ。」

満瑠の言葉に安田は笑った。

「本当だな、修行とは言えない。」

二人は、お互いにメールアドレスを交換するだけで別れた。

「もしかしたらメールはしないかもしれないわよ。」

満瑠はまだ見田との事が吹っ切れないのに、新しい彼を作ってしまうような気持にはなれなかった。

「勿論それでいいです。僕は、あなたからのメールが無ければ、こちらからはメールをしません。でも、勘違いしないで、僕は待っていますから。」

満瑠は安田と別れてから、もうひとつやってみたい事を思いついて、駅に向かった。もう一度山手線に乗ることにしたのだ。新宿方面の山手線に乗ると、窓の外を見るためにドアの近くに立つ。

満瑠がもう一つ思いついた事とは、「社交ダンスを習ってみる」という事だった。昔観た映画を思い出したのだ。その映画は、主人公が毎日乗る電車の窓から見える社交ダンスの教室に、勇気を出して入ってからダンスに魅せられていくという映画だった。満瑠はこの映画がなぜかとても印象に残っている。理由はわからないが、気持ちにうまくはまっってしまったという感覚だ。

社交ダンスを習っているという人は、満瑠の近くには少なくともいない。そして、どんな世界なのか映画でも少し見えたような気がしたが、ほとんどわからない世界だった。映画の主人公が教室に入るのに随分迷ったように、満瑠もきつと入るのに勇気があるだろうと予測ができた。だから、これも修行としてやってみようと思ったのだ。

映画では電車の窓から教室が見えていた。だから、きつとどこかの駅で、教室が見えるに違いないと満瑠は考えた。

電車が駅に近づく度に満瑠は一生懸命目をこらして「社交ダンス」という看板が無いか見ていた。でも、そうそうあるわけでもないようだ。

池袋駅に近づくくと、少し離れた場所だったが、「ダンス」という文字が見えた。その場所の位置を必死で確認してから、池袋駅で降りることにした。

池袋駅で降りて、満瑠は失敗したと思った。池袋駅はターミナル駅なので、人は多いし、建物もごちゃごちゃしている。こんなに広くてごちゃごちゃした駅で、さっきの建物を探せるだろうか？と満瑠はとても不安になった。

とにかく出口を探し、適当に駅の外に出てみた。そこは、居酒屋などがたくさん立ち並んでいて、看板が山ほど出ている。ほとんどが居酒屋や喫茶店だった。

「さっきの『ダンス』という看板を探すのは、難しそうね。」  
満瑠は、つぶやいてため息が出た。

ところが、意外に歩き始めてすぐ「ヤスダダンススクール」とい

う看板が目に入った。

「ヤスタ？」

何だかさっきの安田を思い出して、思わず吹き出してしまったが、これは何かの縁かもしれないと思い、この教室に行ってみる事にした。

映画で見たように、雑居ビルの中にそれはあった。五階が教室のあるフロアーだったので小さなエレベーターに乗り、五階で降りる。エレベーターを降りるとすぐに教室の受付らしきものがあった。そこにいた女性が、エレベーターから降りてきた満瑠を見て「こんにちは。」と大きな声であいさつをした。

満瑠は、いきなり入口になっている構造にびっくりし、更に、迷う間もなく受付の人と会話をする事になったこの状況に、思わずどぎまぎした。

「あの、見学したいのですが……」

満瑠はやつとのことですう口を開いた。

「はい、見学ですね。どうぞ、お入りください。」

満瑠は受付の女性に案内されて、教室の中に入った。フロアーの床は、板張りになっている。音楽が流れ、二組の男女が踊っていた。何の曲かわからなかったが、二組の男女は、手をつないで離れたりくっついたりしながら、上手に踊っていた。

満瑠は、フロアーの周りにいくつかある椅子に座るよう案内される。受付の女性は、パンフレットとお茶を持ってきてくれた。パンフレットといつてもとても簡単なもので、入会金や、レッスン券の種類などが書いてあるだけのものだった。満瑠には、これを見てもあまりピンとこなかった。

「こんにちは。私、清水と申します。よろしくお願ひします。こちらは、初めてですね。ダンスの経験はありますか？」

清水さんという女性は、とても背が高く、美しい人だった。そして笑顔がとても感じ良かった。

「実は私、初めてダンス教室というところに入ったんです。何もわ

からなくて……」

「大丈夫ですよ。何でも聞いてください。」

映画では、確か、何人かいっしょにレッスンを受けていた場面があったと覚えているので、それについて聞いて聞いてみた。

「初級コースは何時からあるのですか？」

満瑠の質問に、清水はちよつと戸惑ったように見えた。

「こちらは、全部個人レッスンなんです。ですから、コースというのではなく、先生が初めての方でも、一から指導します。その方のレベルにあわせてますので安心してください。」

（すべて個人レッスンということは、お金もかかるということ？）

満瑠は、困ったなと思った。映画では、何人かでレッスンしてもらっていたので、そういうコースもあると思っていた。しかし、こは違うらしい。そういえば、映画では、「おばあちゃん先生」が特別に団体レッスンをやってくれたんだ……と思いだした。

「一回のレッスンは、25分です。二回分のレッスンを続けて受ける方もいらっしやいます。チケットの値段はこちらになります。」

清水は、こちらの不安に気付いているのか分からないが、どんどんと説明を始めた。

満瑠は、受け取ったパンフレットを見て、レッスン代がいくらになるのか確かめた。

（普通は月に何回くらい習うのだろうか？）

もしも、週に二回レッスンを受けるとすると、結構な金額になる。満瑠は、少し困ってしまった。こんなに費用がかかるものとは思わなかった。

迷っている満瑠だったが、清水は、どんどん説明を続け、「お客様の身長でしたら、あの先生はいかがですか？」と今踊っている男性を指差した。

満瑠の身長は158センチある。

（私に合う先生だとあのくらいの身長なのか……。）  
指を差された男性の身長は、172、3センチというところだろ

うか。

「担当の教師を決めていただき、毎回同じ先生に習う事になります。あの先生は、林田先生と言います。まだ若い先生ですが、教え方も上手です。」

満瑠がのぞいたことのあるジャズダンスの教室とは、全く違う雰  
囲気だと思った。

何が違うのかと満瑠は改めて教室を観察してみた。まず、生徒と先生の服装が違う。満瑠は、ダンスというのはスポーツだと思っていたのに、男性の先生は皆、ワイシャツにネクタイを締めていた。生徒だと教えてくれた一緒に踊っている女性は、派手なひらひらした上着とスカートだった。おまけに女性は、ハイヒールの靴を履いている。

(運動するという格好ではないわね。)

満瑠は、映画で一度は見た光景だったが、改めてナマで見ること  
で、これは手ごわい相手だ、と思った。

入会するには、入会金がかかるということだった。そして、習う  
には、靴が必要だった。しかし、そんな話を全部聞いても、今回、  
満瑠は、社交ダンスを始めてみようと思った。きつと、見田に振  
られなかったら始める事も無かっただろう社交ダンスを、ひよんな  
縁で始める事で、満瑠は自分が変わるような気がした。

(今日は、『修行』という呪文のような言葉で一日を過ごしている  
気がする。)

そして、この変わった雰囲気の中に自分を入れる事で、きつと自  
分を変えられる、と思える気がした。

今朝からずっと小さくしか息が出来なかった自分の身体が、今、  
大きく深呼吸し始めていると感じてきた。

満瑠はこのヤスタダンススクールに入会し、明日からレッスンを  
始める事にした。

担当の林田先生は、年は25歳で、細身の体格だった。林田先生  
も受け付けの女性と同じで、とても笑顔が素敵な先生だ。



林田先生の話によると、満瑠のように若い生徒は少なく、もしかしたら満瑠が一番若い生徒かもしれないと言っていた。ダンス教室で習うのは、結構費用もかかるのだから、そうかもしれないと満瑠は思った。

靴を購入するまでは、教室の靴を貸してもらえる事になった。ダンス教室の営業時間は、夜は10時までということ、会社帰りでも通う事ができそうだ。満瑠は、次の日の午後8時に林田先生と予約をして教室を出た。

教室を出ると、もう午後4時を回っていた。

満瑠は家に帰ると、母の昌枝にダンスを習う事になったと告げた。昌枝は、いきなりだったのでびっくりしていたが、朝よりずっと元気になっている満瑠を見て安心したようだった。

「社交ダンスの教室って、どんなところ？」

昌枝の質問に、満瑠は詳しく話して聞かせた。自分でもやけに饒舌になっている気がした。そして、見田に振られた事もさらっと話せた。

満瑠が朝とは全く違い、そんな風に楽しそうに話す姿を見て、昌枝は安堵した。

（自分で吹っ切る事ができたのね。）

満瑠にとって何か良いきっかけがあったのだと昌枝は確信し、根掘り葉掘り聞かないでおこうと決めたのだった。

満瑠は、部屋に入ると、今日一日で起こった事を、思い出してみた。

（色々な事があった一日だった。そして、色々な人と出会った。）

満瑠は、今日の出会いが、例え何かの始まりにはならなかったとしても、良い出会いである事は間違いないと確信した。

満瑠は、今まであまりスポーツらしいスポーツをした事がなかった。中学時代は文芸部、高校時代は写真部に所属し、運動部とは縁がなかった。でも、社交ダンスは何だかスポーツとは少し違うよう

な感じがするので、続けられそうな気がしていた。

## 修行編（後書き）

初めて小説を書いてみました。最終編まで読んでいただけたら幸いです。

## 完結編

次の日、満瑠は、仕事が終わった後、軽い食事をしてからダンス教室に行った。教室に入ると、昨日よりたくさん生徒と先生が教室にいるのが見えた。昨日は昼間だったせいか女性の生徒ばかりだったが、今は、男性の生徒も来ていて、1人で腕をあげる格好をし、まるで女性と一緒に動いているような動作を見せている男性もいた。(皆、上手だわ。)

何もわからない満瑠にとって、音楽に合わせてどんどん踊っている生徒達が、とても眩しかった。そして生徒達は皆、満瑠と違い、この教室にしっかりと馴染んでいるように見えた。

まず、満瑠は服装が皆と違っていた。普段運動もしていないし、かといって、ひらひらした服も持っていなかったもので、ただのTシャツとジーパンに着替えていた。女性でズボンをはいている人は誰もいなかったのもいなかったので、満瑠は居心地が悪い気がした。

8時になると、満瑠の前に満瑠の担当教師となった林田がやってきて挨拶をした。

「こんにちは。今日からよろしくお願いします。」

林田は、笑顔で満瑠を迎えた。服装が皆と違う事で少し場違いな感じを持った満瑠は、かなり緊張していたが、林田の笑顔で救われた気がした。

「こちらこそ、よろしくお願いします。何もわからないので、色々教えてください。」

満瑠はこの日、「ジルバ」という踊りを教わった。男性にぴったりにくっついて踊るのではなく、二人で手をつないで軽快な音楽に合わせて、前後・左右に動いたり回ったりする楽しい踊りだった。この踊りはパーティーなどで踊る簡単な種目で、正式な社交ダンスの種目には無いらしい。でも、満瑠には、この簡単な踊りだという「ジルバ」でも、かなり大変な思いをしていた。「踊る」と言うより「動

く」という動作にしかなくなっていたと思う。

「初めてにしては、良く動いていますね。やっぱり若いと違うな。」  
満瑠をやさしく褒めてくれた林田の意外な言葉に、満瑠は、びっ  
くりし、

（今の言葉は、お世辞？ それとも、本心？）と心の中で考えなが  
らも、

「本当ですか？」と、うれしくて思わず声に出してしまっていた。

しかし、履いている靴は、7センチもヒールがあり、転んでしま  
うのではないかと冷や冷やししながら動くものだから、どうもドタバ  
タとしてしまう。

たった25分のレッスンだったが、汗をびっしょりとかいてしま  
った。

「皆さん、きれいな服装でレッスンをしていらっしゃいますが、私  
みたいな服装は、変ですか？」

1人だけ浮いてしまっているように感じていたので、思い切って  
林田に聞いてみた。

「特にレッスンに何を着なければいけないという決まりはないです。  
でも、足を開く事ができないタイトスカートなどは踊れなくて困っ  
ちゃうから、裾が開いたスカートにしてね。勿論、ズボンでもいい  
です。もし、皆が着ているような服が欲しかったら、ダンス用品専  
門店に売っているから、見てきたらいいね。」

（ダンス用品専門店があるのね。）

満瑠は、もう少し続けて習うようだったら、そんなお店に行つて  
みるのもいいなと思った。

満瑠は、1週間に2回のペースで個人レッスンを受けることにし  
た。最初に教わった「ジルバ」が踊れるようになると、次は男性と  
ぴったり身体をくっつけて踊る「ブルース」という種目が始まった。  
まだ良く知らない先生と顔を近づけることは、最初、少し抵抗があ  
った。周りを見ると、他の生徒達は全然気にする様子もない。

(慣れてしまおうと平気なものなのかしら?)

そんなところも、ジャズダンスなどとは違ったところの1つだと満瑠は思った。

「ブルース」も「ジルバ」と同じで、正式な社交ダンスの種目ではないとのことだった。3回目のレッスンで満瑠は、慣れてくるとこれらのステップはそれほど難しくはないと感じるようになった。そして、4回めからはこの2種目は卒業し、正式な社交ダンスの種目を教わることになった。

「今日から、ワルツを踊りましょう。」

林田先生は少しうれしそうに4回めのレッスンを始めた。

満瑠は、やっと少し出来るようになったのにもう次の種目を始めると聞いて、もう少しゆっくりやって欲しいなと思ったが、「ワルツ」という種目は、前からやってみたいと思っていたので、「はい、是非、教えてください。」と言っていた。

満瑠は、ダンスを習い始めて2カ月経った頃から、今までのジーパンにTシャツだった服装をやめて、皆が着ているようなレッスン着を専門店で購入し、着るようになった。

専門店ではダンス教室以外ではとても着るには恥ずかしいような服がたくさん売っていたが、その中にはシンプルな淡い青色の綺麗なワンピースを選んだ。そして靴も自分に合うスタンダード用のダンスシューズを買いそろえた。

社交ダンスには、スタンダード種目とラテン種目があり、ワルツやタンゴなど男性と女性がぴったりくっついて踊る踊りをスタンダード種目といい、手をつないで少し離れて踊るルンバやチャチャチャという踊りをラテン種目と言うと教わった。靴は、スタンダード種目とラテン種目では少し形が違う。まずワルツを習う事になったので、満瑠はスタンダード種目用のダンスシューズを習うことにした。

ダンス用品専門店には、様々なダンス用品が売られている。1番

満瑠の目をひいたのは、ドレスだった。レッスン着もひらひらして派手だと思ったが、それどころではないきらびやかなドレスがたくさん売られていたのを見た時、満瑠は、思わず立ち止まって、「わあ！」と叫んでいた。

近くでドレスを試着している女性がいた。真っ赤なドレスで、金のラメや光る石がたくさんついている。しかも着ている女性の年齢は、かなり上ではないかと思われる。

（この世界では、年齢なんか関係なくなっているんだわ。）

満瑠は、益々不思議な世界だと思い、とても元気がでてくると思った。

ダンスを始めて2カ月が経った5月のゴールデンウィークに入った初日。満瑠は、見田に振られた直後にレストランで出会ったあの安田と、恵比寿駅近くの喫茶店で再会していた。安田との出会いは、恵比寿だったので自然と恵比寿で会う約束に決まった。

1週間前に満瑠から初めてメールを送ったのだ。ダンスのお陰か、見田に振られた事を少しずつ忘れかけていた満瑠は、携帯電話のメールリストを見て、ふと安田のことを思い出した。ダンスを始めて、身体を動かし汗をかくようになったせいか、身体の調子も良くご飯がおいしい。仕事の方も、もしかしたらうまくいかなくなるのではないかとあの時は心配だったが、そんな事もなく、かえって新しい仕事を任され、それがうまく運んできている。もしかしたら彼との出合いが、幸運を招いているのかもしれないという考えが頭によぎり、また会ってみたくなったのだ。

殆ど同時に、二人は喫茶店に到着した。ゴールデンウィークだったので、どこも混んでいる。この喫茶店も、店内はとても広いが、かなりの人で賑わっていた。わいわいとしているので、大きな声で話さないとお互いの声が聞こえなくなるくらいだった。

「秋山さんからメールが来たときは、飛び上るほどうれしかったよ。」

安田は、本当にうれしそうに言ってくれた。

「2か月経ってもメールが無かったから、もう来ないと思っていた。」  
「私も実は、メールはしないつもりだった……あの時はね。あれから私、もうひとつの修行をやっているの。それが、楽しくて……そうしたら、急に安田さんに会いたくなってしまうたと言っわけ。」

満瑠は、また「修行」という言葉を話す自分を楽しんでいた。あの時の満瑠が「修行」と口にしていた時と違って、今は、こんなにも楽しい。同じ言葉を言うのに、こんなに違いがあるということ、満瑠は深く身にしみて感じていた。

「楽しい修行かい？ それじゃ、修行にならないんじゃない？」  
「最初は、大変だったのよ。でも、今はとても楽しい。そうだわ、そういうのを本当の修行っていうのかも知れない。」

「何だかよくわからないけど、この前とまるつきり違って見えるね。よかったよ、見違えるように元気になって。あの時は、別れてからも心配だったよ。でも、こちらからメールはしないって言ったから……。」

「あの後ね、社交ダンスを習い始めたの。すぐよ、安田さんと別れてからすぐ。」

「社交ダンス？」  
「驚いたでしょう？ 池袋にある『ヤスタダンススクール』っていう教室で習っているの。あれから2カ月、結構真面目に通っているのよ。」

「えー、ほ、本当？」  
安田は、満瑠が想像するよりもはるかにオーバーに驚いた反応を示した。あまりにもそのジェスチャーが大袈裟だったので、ちよつとムツとしたくらいだ。

安田は、水をごくくと飲みこんでから、1息ついて言った。  
「『ヤスタダンススクール』の経営者は、僕の叔父なんだ。」  
「えー！」



今度は、満瑠が驚く番だった。頭の中がぐるぐる回ってきそうだった。そういえば、あの日も、ダンス教室の名前が同じだったから、「おもしろい、これも縁だ」と思っただけで入会する事にしたのを思い出す。

「僕、実はあの日までダンス教師としてあの教室で働いていたんだ。入れ違いに君が習い始めるとは夢にも思わなかったよ。」

「えっ？ ダンス教師？ 安田さんはダンスの先生をしていたの？ 今は辞めてしまったの？ どうして？」

安田がダンス教師をしていたという事にも驚いたが、それを満瑠が振られた日に辞めてしまったという事も不思議に思った。満瑠は、次々に疑問が湧き上がってきたので、段々身体が前のめりになっていく。

「あの日、僕が振られた相手というのが僕のダンスのパートナーをしていた女性だったんだ。彼女もダンス教師をして一緒にカップルを組んでいた。でも、喧嘩が元でカップルを解消してしまった。僕は、彼女と別れた事をきっかけにダンス教師もやめることにしたんだよ。」

「それじゃ、今は何をしているの？」

「父が小さな会社を経営していてね、その手伝いをしている。ずっと、父は僕がダンスをやっていることに反対していたけれど、どうしても彼女とダンスを続けたくて頑張っていたんだ。でも、振られちゃったからもうダンスを続ける気持ちも無くなってしまった。ダンスにこだわっていたのではなく、彼女と一緒にダンスをしていたかったんだとわかった。だから父の会社を手伝う事にしたんだ。それがずっと父の希望だったし。父はとても喜んでるよ。僕もこれでよかったと思っっている。」

あの時、安田がそんな境遇にいてそんな展開になっていたとは、満瑠には思いもよらない事であった。それなら、安田だって満瑠以上に辛かったに違いないと思うが、今の安田を見ると案外元気そうに見えた。

「そんなに辛い目にあつたというのに、今は随分元気そう。」

満瑠は、そんな安田の事が不思議に思えてそう尋ねた。

「そう見えるかな？ あの時は結構シヨックで僕も悩んだよ。だから、あの時、君と出会えた事で少し救われた気もする。そんな君ともう一度会えた事は、本当にうれしいよ。今は、新しい仕事を覚える事で1生懸命の毎日だから、くよくよしている暇もないしね。」

満瑠は、この2カ月を自分と事情が違うにせよ、よくも似ている日をお互いに過ごしたものだど、安田との出会いに「運命」を感じずにはいらなかった。

「ところで、個人レッスンを受けている訳だね。それじゃ、レッスン代も大変でしょう？」

「そうね、その通り……。思ったより費用がかかるからびっくりした。でも、楽しくなってきたから、もう少し続けるつもり。」

「ダンスを習うのは、全く初めてなんでしょ？ それじゃ、ステツプを覚えるだけでも費用が大変だ。失礼だけど、まだ若いから給料だって安いだろうし。個人レッスンだけでうまくなるうとしたら、給料が飛んじやうよ。」

安田に言われると、そうかもしれないと思った。まだ、ワルツを始めたばかりだけれど、聞けば、社交ダンスの種目は1種目もあると言う。それを全部覚えるまでにどれくらいレッスンに通わなければならぬかを考えると、確かに怖い気がする。

「僕でよかつたら、ステツプだけでも教えるよ。」

安田の意外な申し出に、またまた満瑠は驚いた。今日は、驚く展開ばかりだと思った。

「会社の倉庫に空いたスペースがあるから、そんなところで良かったら少しずつ教えるよ。僕にはこんな事ぐらいしか君に出来る事はなさそうだし。」

満瑠にとつて、「こんな事」どころじゃない申し出であつたから、断る理由もない。

「いいの？ 本当に？」

満瑠と安田は、本当にひよんなめぐり合わせで出会い、そしてこれからは、ダンスを教えてもらうという理由で、これからも会う事になった。

この日、二人は喫茶店でダンスの話で盛り上がった。満瑠が初めてダンス教室に足を踏み入れて、少し変わった世界だと感じた事を話すと、安田は笑って言った。

「僕は、ずっと叔父のダンス教室を小さいころから見ていて、大学時代から踊っていたから普通だと思っっている事だけ。そうだね、確かに初めて見る人にとっては、少し、いや、かなり変わった世界かもしれないね。でも満瑠さんも、そんな世界が好きになったっていうこと？」

「満瑠さん」と、急に名前と呼ばれて、満瑠は、「ドキッ」とした。「うん、何だか、私にとっては、いるべき場所だったような気がする。」

少し顔が赤くなったかもしれないと意識しながら、満瑠はそう答えた。そんなことは、今まで考えてもいなかったが、今突然そんな気がしたからだ。

「随分派手なドレスを見た時は、ちょっと驚いたけれど、それもいいかもしれないと思ったわ。」

満瑠が安田からダンスを教わるのが「毎週土曜日の夕方」と決まり、次の土曜日、満瑠は、安田が勤める会社の倉庫に出かけた。

会社の倉庫は板橋区にあり、静かな住宅街の中だった。夕方からにしたのは、昼間は会社が休みであつても人が出入りする事もあるからだ。

駅で待ち合わせをして、二人で倉庫へ歩いて行った。練習の場所は倉庫だから、ダンスシューズはいらなと言われた。教室のような床とは違うので、靴が傷んでしまうからだ。

倉庫に着いて、満瑠は「なるほど」と思った。あまり広くない倉庫の隅が空いていたが、「ダンスをする」というような場所ではな

かった。床はコンクリートがむき出しだったし、周りにはたくさん  
の荷物や機械が並んでいた。

「こんなところだけど、公園かどこかのような外で踊る訳にもい  
かないし、レッスン場を借りたらそれもお金がかかるし、ステップだ  
けなら、こんなところでも出来ると思うよ。」

静かに止まった機械の横で、音楽をかけながら踊るダンスは、ロ  
マンチックなものでは決まてないけれど、安田の申し出はとも  
れしかった。レッスン代がかからないという金銭的な事だけでなく、  
相手が安田だからうれしいのだ。

「場所がこんなところだし、僕は、もう教師じゃないから教えるの  
はステップだけにするよ。それ以上の事は、今習っている先生から  
教わった方がいい。林田先生は、僕は良く知っているけれど、踊り  
も教え方もとても上手な先生だよ。」

「わかったわ。安田先生、どうぞ、よろしく願います。」

満瑠は、改めて、安田に頭を下げた。

「もう、先生じゃないから、それはやめてよ。」

「それじゃ、何て呼べばいい？」

「出来たら、下の名前です。」

「誠治さん？」

「いいね、それ。」

振られた者同士で、いつのまにかこんな事になってしまった二人  
だが、「私の事どう思っているのかな？」とあれからずっと満瑠は  
安田の事を考えていた。

ステップを教えるだけとはいえ、誰もいない静かな倉庫で、二人  
で身体を合わせて組む訳だから、満瑠はダンス教室の林田と踊る時  
よりもはるかに緊張した。

でも安田には、満瑠のような緊張した素振りは少しも見えなかつ  
た。淡々と、ステップを満瑠に教えていった。

（やっぱり、ダンスの先生というのは、こんな風に組むことなんて、  
何でも無い事なのね。）

満瑠は、安田のそんな態度にちよつとがっかりもしたが、

（私だったら、何を勘違いしているんだろう。ステップを教わりに来ただけなのに……。ステップに集中しなきゃ）と恥ずかしく思った。レッスンは、1時間程度で終わりになった。種目はワルツで、今教わっているステップの復習と、新しいステップ3種類を新たに教えてくれた。

「今度のレッスンの時、このステップをやりたいと言ったらいいよ。ステップを覚えておけば、今度はその先から習えるから。」

「本当にありがとう。とても助かる。私、ワルツはとても気に入っているし、実は、前から踊れるようになりたいと思っていたのよ。」

二人は、倉庫にある少し古ぼけた椅子に腰かけ、スポーツドリンクを飲みながら話している。

「昔、父が母を口説くときに、『僕と将来、ワルツを踊って下さい』って言ったそうなの。実際、父はワルツなんて踊れなくて、結局、習う事もなかった。母もそれをわかっていて、そんな風に誘った父の気持に心動かされて結婚したっていう話を母から聞いたから。父が踊りたいと思っていたワルツって一体どんな踊りなのかなって、とても興味があったわけ。」

「それで、どうだった？ 実際に踊ってみて。」

「まだ、踊っている感覚もないくらいの下手くそな段階だから良いも悪いも全然わからないけれど、このワルツの曲は特にいいわね。」

この日練習の時にかけた曲は、昔の映画音楽の曲で、かなりロマチックな曲だと満瑠は思った。こんな曲で踊りたがっていた父は、かなりロマンチストだったんだなと改めて思う。

「そうそう、これを見てみるといいよ。これは、今の世界チャンピオンやトッププロが踊っているビデオ。プロ達にとっても憧れの選手達だよ。これ、貸してあげるから、いつか満瑠さんもこんな踊りを目指して頑張ってみてよ。」

そう言って、安田は、紙袋に入ったDVDディスクを満瑠に手渡した。

「へえ、世界チャンピオン？ 1番うまい人の踊りっていうことね。うん、見てみたいわ。ありがとう。」

DVDのジャケットを見ると、豪華なドレスと燕尾服をまとった男女が踊っている写真が写っている。教室でも見られない、更に違う世界がそこにあつた。

「それじゃ、駅まで送るよ。」

急に、安田は言った。

「え？ そうね、ありがとう。」

満瑠は、少しびっくりした。安田は、本当にステップを教えるためだけに自分を誘ったのだとわかったからだ。

「僕は、家がこの近くなんだ。だから、今の通勤は徒歩だけ。」

食事でも誘ってくれるかと思っただけに、満瑠はかなりがっかりしていた。

（こんなに素っ気ないとは……。）と思いながら、駅で安田と別れた。

満瑠はこの時、過剰に期待しすぎてしまったためにかえって空振りしてしまい、ぽっかり胸に穴が開いてしまったような気持だ。しかし、素っ気ない態度であっても、毎週「彼と会える」事は、満瑠の最大の楽しみになっていた。

それから毎週土曜日は、安田からステップを習い、火曜日と木曜日はダンス教室で林田からの個人レッスンを受ける日が続いた。1週間に3日間もダンスを習う形になったので、更に2か月もすると、満瑠は自分でもびっくりするくらい踊れるようになった。まだワルツだけを習う段階だったが、ワルツの良さをだんだん感じる事ができるようになってきたのだ。教室でも、今まで周りの生徒達が格段に上手だと思っていたのに、意外にそうでもないなと思えるようになってきた。

ワルツは、他の種目と違い、上下運動がある種目だ。低く沈んだり高く伸びあがりたりを二人で繰り返しながら踊る。そこに回転が

加わることで、優雅さを表現すると教えられた。そして、この前安田から貸してもらったビデオを見たが、チャンピオンの踊るワルツはまさに優雅そのもので、別世界のものだった。女性は、この前ダンス用品専門店で見たとようなゴージャスなドレスをもっと豪華にしたようなドレスを着ていた。

二人で踊っているというのに、まるでひとつの生き物のようだと満瑠は思った。どうしたらこんな一体感がつくれるのだろうかと思ってみたが、満瑠には、思いつく筈もなかった。

（もっと、身体をやわらかくしたらいいのかしら？ それとも筋肉をもっと鍛える？）

そんな事くらいしか思いつかなかった。

相変わらず、安田は満瑠にステップを教えるだけで、満瑠には素っ気ない態度をとっていた。でも、土曜の夜にいつも予定が入らず空いている訳だから、他に付き合っている女性がいる訳でもなさそうだと満瑠は思っていた。安田の気持は満瑠にはよくわからなかったが、ステップを色々覚えてくるにつれ、安田と、ステップを教わるだけでなくちゃんと大きく踊ってみたいと思うようになっていた。床がコンクリートな上に、二人とも運動靴で踊っているので、きちんと大きく踊る事はできない環境だったのだ。

8月のお盆休みに、満瑠は親友の杏子と久しぶりに会った。お互い、東京出身なので、田舎に帰る必要もないから、帰省で静かになった都会で会う事になったのだ。

杏子と会うのは、満瑠が見田に振られた時以来だ。メールでのやり取りで、満瑠がダンスを習っている事や、安田との事などは、杏子に伝えているが、会うのは5カ月ぶりにもなる。

あれから半年も経たないのに、杏子の印象が随分変わったと満瑠は思った。何だか綺麗になったような気がした。

「私、結婚するの。」

いつもの京都風パブで、最初のビールを飲み干すなり、いきなり

杏子は言った。

「え〜？」

満瑠は、これぞ晴天の霹靂だと思った。

「何で急にそうなるの？」

満瑠は結婚に至るまでに自分に何の話もしてくれなかった杏子に、ちよつと怒りを感じた。満瑠は、いつだって杏子に自分の身の回りの変化を教えている。それなのに、杏子は急にこんな話を満瑠にする。それが少し許せないと思った。

「ごめんね、相手は、昔、満瑠が付き合っていた見田さんの友達。」

「見田」という言葉が杏子の口から出てきたために、一瞬満瑠は驚いたが、杏子の結婚相手が見田でなかったと分かって、とりあえずはほつとした。

それにしても、どうして今まで何も話してくれなかったのかと満瑠は杏子を責める口調になっていた。

「彼は逸見さんと言って、満瑠が見田さんと別れた直後に知り合ったの。そして見田さんと友人だとわかったのは、その更に後の事。彼と見田さんは、高校時代からの友人らしいの。私も、本当にびっくりしたわ。まるで、私達みたいな関係だつてことですよ。私、その事が分かった時、かえつて満瑠に彼の事を話せなくなつてしまつた。だって、満瑠は見田さんに振られたばかりだし、見田さんは、満瑠とのことを逸見さんにも話していたらしいから。」

「私との事をどんな風に？」

見田が満瑠とのことをどんな風に話していたのか、満瑠はとても興味があつた。

「その事だけど、見田さんはとても落ち込んでいたらしいわ。」

満瑠にとっては意外な言葉だつた。満瑠を振つた事で罪悪感でも感じていたと言うのだろうか。

「見田さん、満瑠の事、とても愛していたつて。だから、別れてしまった事がとても辛かったみたい。彼が見た事もないくらい見田さんは落ち込んでいたらしいわ。」



別れたいと言ったのは祐司さんの方なのに、別れたのが辛いなんて勝手な事を言っているとしたら満瑠には思えなかった。

「あれから見田さんとは全然連絡をとっていないの？」

杏子は心配そうに満瑠を見た。

「意味がわからない説明で別れたいと言った人に、言う言葉なんてないし……。もう、いいわ。私、祐司さんの事は忘れたいし。もう、すっかり元気になったから、過去は振り返らない事にする。」

これ以上満瑠は、見田の話は聞きたくなくなった。

「それより、杏子の結婚の話を教えてよ。女性は、結婚が決まると綺麗になるっていうけれど、本当の事なのね。くやしけど、今の杏子はとっても綺麗だわ。」

杏子の結婚は来年の春を予定している。彼は商社に勤めているから、もしかしたら近い将来海外に住む事になるかもしれない事、その時彼女は仕事を辞めてしまうつもりだという事などをとともうれしそうに話してくれた。折角バリバリと活躍している仕事を辞めてしまつなんて、勿体ないと満瑠は思ったが、そうしてもいいと思える相手に巡り合えた杏子が、とてもうらやましかった。

今まで、恋愛の話は1方的に満瑠が話して聞かせていたと言うのに、今日はまるで逆転している。この日は杏子の彼との馴れ初め話や、彼がどんなにいい人かという話で大いに盛り上がったので、満瑠は安田との話は何も出さなかった。まだ、安田とは何もなかったし、安田が満瑠の事をどう思っているかもわからない状態だったから、杏子にはどう話していいのかわからなかったのだ。

2か月が経ち、10月になった。

ダンス教室に満瑠は、相変わらず週に2回のペースで通っていた。教室では、12月25日にクリスマスパーティーが開かれる。クリスマスパーティーでは、ダンスタイムやゲーム、先生達のデモンストレーションがあるそうで、とても楽しそうだ。

「クリスマスパーティーで踊れるようにラテン種目もやるわ。」

レッスンで、林田先生はそう言った。

この2カ月で、満瑠は、ワルツの種目に加えてタンゴも習い始めていた。タンゴは、ワルツとはまた全然違う踊りだったので、なかなかうまくステップを進める事ができないでいた。それなのに、更にラテン種目にもすすもうとする林田に、満瑠はちよつと不満に思う。しかし、林田はそんな満瑠にこう言った。

「パーティでは、ラテン種目とモダン種目の音楽が交互にかかるから、片方しかできないと、楽しみが半減しちゃうんだよ。」

そんなこともあるのかと満瑠は驚いたが、それでも、まだワルツやタンゴをまともに踊る事ができない今、更に全然違う踊りを習う気がしなかった。

「もう少し、ワルツとタンゴがうまく踊れるようになってからにしたいです。」

「秋山さんは、随分上手になったよ。大丈夫、もう、ワルツもタンゴもパーティで踊れるから。」

そう言われても、満瑠は嫌だった。林田先生がいくら上手になったと言ってくれても、なぜか満瑠にはそう思えなかった。それは、見た目がどのようなのではなかった。もしかしたら、見た目には、年齢が若い満瑠は綺麗に見えているのかもしれないと思う。でも、そういう観点ではなく、何かがうまくいっていないと満瑠は思うのだった。

そう頑固に言う満瑠に、先生もそれ以上は言わなかった。今まで通り、ワルツとタンゴを引き続き教わる事になった。

12月になった土曜日。満瑠は、いつものように夕方、板橋区の倉庫へ行った。相変わらず安田は、淡々と満瑠にダンスを教えてくれる。ステップだけ教えてくれると言っても、そんなにステップの数があつてもないので、最近では、ステップ以外のアドバイスもたくさん教えてくれるようになっていた。ただ場所が場所なので、きちんと大きく踊る事はなく、あくまでも軽くステップを踏むだけ

になっていた。

練習が終わると、いつも少し雑談をする。安田は、毎日新しい仕事を覚えて、生き生きと仕事をしているようであった。もう、ダンス教師だった時の事は話さなくなり、ダンスに未練は無いように満瑠には見えた。そして、今の仕事でもっとやりたい事があるという話も、よく安田の口から出るようになっていた。そんな話を聞くと、満瑠は少し寂しい気がした。自分はダンスの面白さを感じてきたというのに、もう安田にとっては興味の薄い事になってしまっている。つまり、それが満瑠への興味も薄らいでいつている事につながるような気がしたからだ。

満瑠は、今までずっと安田に言いたかった事を勇気をだして切り出してみた。

「今度、一緒にちゃんと踊ってもらえませんか？ 私、段々踊れるようになってきたので、林田先生以外の人も踊ってみたくなんです。それに、今度クリスマスパーティーがあるから、誰とでも踊れるようになりたいし。」

本心を言えば、クリスマスパーティーなんかもよかった。安田と一緒にちゃんと踊ってみたかったのだ。安田からもう半年もこっぴどくダンスを教わっているが、その後に満瑠を食事さえも誘ってくれた事はなかった。満瑠に好意を持っているようにも思える態度なのに、毎週1時間ほどダンスに付き合うだけに徹している。

一度、満瑠の方から食事を誘ってみた事があったが、「この後、用事があるから」と断られてしまった。それ以来、もう満瑠から誘うのはやめていた。

安田と恋愛に発展するのは、もう随分前からあきらめかけていたが、せめてダンスだけでも安田ときちんと踊ってみたかった。いつも、どうしてこんな倉庫だけで教えるのかも良くわからない。そして、今までそれを聞くのも遠慮してしまうような雰囲気、安田の中に感じられたから、満瑠は理由を尋ねる事もなかった。

「そうだね、クリスマスパーティーの前に一度、二人で、ダンスホー

ルへ行つてみる？」

思いもかけない安田の言葉に、満瑠は耳を疑った。今までは、あんなに素っ気なかったのに、（急にどうしたんだらう？）と満瑠は思った。

「ダンスホールなんて行つた事がないけれど、どんなところ？」

満瑠は、なんだか久しぶりにわくわくしてきた。

「クラブみたいなのところといったらいいのかな。社交ダンスの曲が生バンドで演奏されるんだ。そして、広いフロアーで社交ダンスの曲、ワルツやタンゴを踊るところだよ。」

満瑠は、映画などで見たヨーロッパの宮殿のダンスホールが、一瞬目に浮かんだが、まさかそんなところではないだろうから、あまり期待しないでおこうと思った。どんなところでも、安田といっしょに行かれるのなら、うれしかった。

次の土曜日にダンスホールに行く約束をして、いつもの時間に満瑠は安田と別れた。

満瑠は次の土曜日まで、待ち遠しくて仕方なかった。安田は今まで本当によくダンスを教えてくれたが、それ以上の事を満瑠に誘ってはくれなかった。とても優しくしたがその態度は紳士的で、二人だけの倉庫の中であっても、満瑠の身体を求めてくる事も無かった。すでに安田との恋愛はあきらめていたのに、今回思いがけず二人で出かける事になったので、また淡い期待が芽生え始めてしまった。満瑠はこの半年の間に、安田の事を好きになってしまったのだと自分で確信していた。

その日はやってきた。

満瑠と安田は、午後7時に新宿駅で待ち合わせ、一緒にダンスホールへ入った。ロッカーで着替えてホールに行くと、既にとてもたくさんの人が踊っていた。

満瑠が最初に想像していた宮殿のホールとは、やはり天と地ほどの違いがあったが、これから安田と踊れることで胸が躍った。

しかし、いざ踊ろうと眺めてみると、空いているスペースはほとんど無いように満瑠には見えた。満瑠がいつも教室で踊っている時には、空いたスペースがたくさんありゆっくり踊れる。しかし、ここはとても混雑していて、この中に入ったら、隣同士でぶつかり合ってしまうのではないかと満瑠は思った。

「すごい人ね。こんなにたくさん人がいるのに、踊れるの？」

「このぐらいは、普通だよ。大丈夫、僕についてきてくれれば。」

満瑠は、ジルバとブルース、そしてワルツとタンゴしか踊れないので、その曲がかかったときだけフロアーに入って踊る事になる。

最初は、ブルースの曲がかかった。

安田は満瑠の手をひいてフロアーに入り、すかさず空いている場所を確保する。すぐに二人は組んで踊りだした。ブルースは簡単なステップだが、満瑠がブルースを習ったのは最初だけなので、もう忘れかけていたし、突然この騒がしいフロアーで踊ると言われても、すぐには溶け込めなかった。満瑠は頭が真っ白になり、安田の足を踏むわ、転びそうになるわで、何だかわからないまま曲が終わってしまった。

「ごめんなさい、だめだわ、何が何だかわからなくなっちゃって。」

「ははは、最初は仕方ないよ。だんだん慣れてくるから大丈夫。」

安田は、あまり気にしていない様子だった。

次の曲はラテンの種目がかかったので、二人はフロアーから出たフロアーの外から踊っている人たちを見ると、皆、とても慣れているようだった。楽しそうに、クルクル回っている。ラテン種目なので手をピンと伸ばしたりポーズをつけたりして、とても格好良く踊っていた。

満瑠が気後れしていると察したのか、安田は、

「さあ、これからどんどん踊るよ。あまり力を入れないで、僕について来てくれればいいから。」とって、満瑠に笑顔をみせてくれた。

「僕について来て」という言葉が心に残る。

満瑠は、そんな安田の言葉がうれしくて、なんとか期待に答えられるよう頑張ろうと思った。

次の曲は、ワルツだったので、すぐに二人はフロアーに出る。ワルツはいつも踊っている曲だから、満瑠はがんばろうと思った。

でもワルツには、ブルースと違ってステップが色々ある。ダンスは、男性が何のステップを踏むのかを決めて踊りだし、女性がそのリードに合わせてついていくようになっていくが、満瑠には、安田が何のステップをやるうとしているのか、わからないことが多い。

教室では、林田先生が最初に何のステップを踊るのかを話してから、そのステップを踏んだり、ステップの名前を声に出して教えながら踊ったりする事が多く、リードを読まなくても踊れる事が多い。しかも、この混雑した中では人を避けながら踊らなくてはならないので、ステップの途中でぶつかりそうになり違うステップに変えたりするなど、臨機応変に対応しなければならぬ。

勿論、安田はきちんとリードをしていたのだと思うが、満瑠にはそういう踊りにはまだ慣れていなかった。さっきのように、安田の足を踏んだり、よろけたり、ぶつかったりしながら1曲が終わってしまった。とてもじゃないが、優雅なワルツとは言えない踊りだった。

満瑠は、悲しくなってきた。今日は、安田と楽しく踊るはずだった。優雅にワルツを踊っている姿を想像していたのに、こんなことになってる。満瑠は、林田先生が、もう満瑠のワルツは大丈夫だからと言って、何だかそう思わなかったのは、この事だったのかもしれないと気づく。なんとなく、一緒に踊っている相手と、一緒に踊っていないような気がしていた。こういう気持ちを「一体感がない」というのか……。満瑠は、安田から借りたビデオのチャンピオンの踊りを見て感じた一体感が、自分には全然ないことに、違和感を覚えたのだと思った。

安田も、最初は、大丈夫だよと笑っていたけれど、何曲か踊って

いくうちに、少し険しい顔つきになってきた。

5曲ほど踊ったので、休憩することにした。

フロアーの周りに、バーのカウンターがあり、二人は飲み物を注文する。満瑠は、さっきから思っている事を安田に話し、自分は、少し踊れるようになったと思っていたのに、全然踊る事が出来なくてシヨックだったと告げた。

「最初は皆、踊れないものだよ。ずっと先生とだけ踊っていると、違う男性とは踊れないと言う話はよくある。それに、チャンピオンの踊りみたいに一体感を感じたいなんて、それは、まだまだ先の話だよ。……でも、満瑠さんは、普通の人よりは相手を感じようとする事が足りないのかもしれないね。相手を見ていないって言うのか……。」

満瑠は、最後に安田が言った「相手を見ていない」という言葉を聞いて、ギクツとなった。同じ言葉を言った人を思い出したからだ。

見田と別れた時の場面が満瑠の脳裏に蘇ってきた。

「いいかい満瑠さん、相手のリードを感じるには、相手をじっと感じようとする気持ちが必要なんだ。相手の声や行動を見て頭で考えるのではなく、相手の動きを身体で聞こうとするんだ。ダンスはね、たとえ女性がステップを知らなくても、男性のリードだけでも踊れちゃうものなんだ。そのくらい女性が男性のリードを感じる事は大事なんだよ。」

満瑠は、その話を聞いて、目からうるこが落ちたと思った。ダンスは、ステップを覚える事が1番大事だと思っていた。だから、教わったステップを家でも練習したし、教室では、ステップの事だけを考えて踊っていた。でも今、安田はステップを知らなくても踊れると言っている。

そして、もつと大事な事も言っていた。

(相手を感じる事。)

満瑠は、心の中で繰り返した。「満瑠には足りない。」と安田は言っていた。

「ダンスは、二人で踊るけれど、ワンピースになって踊らないと駄目なんだ。二人で別々のステップをそれぞれしてもつまらないんだよ。踊っている方も見ている方もね。」

「あのチャンピオンの踊りは、1つの生き物のようだった。」  
満瑠は、安田の言葉で、前に借りたDVDのチャンピオンの踊りを思い出していた。

「誠治さんはすごいわ。私と何回か踊っただけなのに、どうして私のそんなところがわかるの？ 自分では全然気がつかなかった。」  
「人の事だから、わかるのかもしれない。自分の事はわからないものだよ。僕だって、色々な事が分からなくて、苦しめてしまっていた。」

安田はそう言って、少し遠い目をした。

満瑠は、安田が苦しめてしまった人というのは、別れたパートナーの事かもしれないと思った。でも、安田が言いだすまでは、言わないでおこうと思う。

少し休んだので、もう少し踊ろうと言う事になった。安田は、今度はステップの直前にステップの名前をつぶやいたり、リードを大袈裟にしたりして、満瑠に分かりやすいように心がけてくれた。

何曲か踊り出したら、前より少し慣れてきたせいもあって、少し踊りが楽になってきた。力も抜けて来たようで、リードも少しわかるようになってきている。

安田が言ったように、満瑠は、自分が踊る事ばかり考えてしまっていたのだと分かってきたのだ。

（ここに相手がいるのだから、ちゃんと心で見なくてはいけない。）  
満瑠は自分に言い聞かせた。

またワルツが流れた。その曲は、倉庫で練習している時に聴くあの映画音楽の曲だった。

満瑠は、全身の感覚を安田に集中させた。ステップは考えないようになろうと思った。安田のリードが身体に伝わってくるのを感じる。そのリードに逆らわないよう満瑠は全身の神経を集中させた。



ワルツのメロディーが美しく聞こえてきたが、それもあえて聞こうとしなかった。聞こうとしなかったが、しっかりと耳には残っていた。相手を見ると言う事は、こういうことなのだと思えた瞬間だった。満瑠は、自分なりの精いっぱいの一団感を味わう事ができたと思っただ。この1曲は忘れられない1曲になるとさえ思っただ。

この曲で満瑠は満足した。この踊りをラストダンスにしたかったので、満瑠の方から「もう帰ろう。」と言っただ。

ホールを出た後、安田は満瑠を居酒屋へ誘ってくれた。

最初のビールを一気に飲み干して、満瑠はとってもいい気持ちになった。安田と一緒に食事をするのは、初めて会ったフレンチでの「修行」の時以来だ。

「今日は、ありがとう。とっても楽しかった。最初はどうなるかと思っただけれど、色々なアドバイスをしてくれたからとても勉強になったわ。そして最後にいい踊りができた。」

満瑠は、少し意味深な事も言ってみたかったが、ただの社交辞令みたいな口調になってしまう自分にジレンマみたいなものを感じる。「僕も楽しかったよ。満瑠さんがダンスを始めてまだ1年にもならないのに、ここまで上達したのはすごいと思うよ。僕も教えた甲斐があっただよ。」

そんな安田のやっぱり社交辞令的な言葉に満瑠はすこしがっかりした。

「来週からは、いつも通りのレッスンになるのね。」

今日みたいな事は、もう当分無いのかと思うと満瑠は急に寂しい気持ちになった。

ところが、安田からは意外な言葉が待っていた。

「その事だけど、僕のレッスンは、今日で終わりにして欲しい。」満瑠は、奈落の底に突き落とされた気持ちになった。自分でも気付かずに、飲もうと思っただ持ち上げたビールジョッキを持ったまま身体が固まってしまっただいた。

安田は、驚いている満瑠を意識しながらも、更に話を続けた。

「僕は、満瑠さんも知っている通り、もうダンスとは縁を切りたい  
と思っっている。今までは、乗りかかった舟だと思って続けていたけ  
れど、満瑠さんと僕は、最初からダンスで知り合った訳ではないし、  
ダンスを教える事で満瑠さんと付き合うと言うのは止めにしたとい  
んだ。そうではなくて、もしダンスが出来ない僕とでもよかつたら、  
恋人として付き合っしてほしい。」

「付き合っしてほしい。」という言葉が、満瑠の頭の中でぐるぐる回  
った。奈落の底に落ちたと思った気持ちだが、今度は舞い上がって  
く……。なんだか、上がったたり下がったりの連続で、満瑠は訳がわ  
からなくなりそうだった。

「満瑠さんと初めて出会った時、僕は、一緒にダンスをやってきた  
パートナーと別れてしまった。あの後、彼女とじっくり話しをした。  
僕は、気がつかないうちに、彼女をずっと傷つけていた事に初めて  
気がついた。彼女から言われるまで全然気がつかなかった事に、僕  
はとてもショックを受けた。自分の不甲斐なさに、まるつきり自信  
を無くしてしまったんだ。だから、満瑠さんの事を好きになっただ  
れど、打ち明ける勇気が出なかった。ダンスを教える事くらいしか、  
僕には自信を持つ事ができなかった。だから、兎に角、自分を奮い  
立たせるために、仕事で1人前になろうと考えた。そうすることで、  
自分を成長させたかった。満瑠さんがさんざ言っていた『修行』と  
いうヤツさ。僕にとっては、仕事で1人前になることが『修行』に  
なると思った。だから、自分に自信がつくまで、半端な気持ちのま  
ま満瑠さんと接するのはやめようと思った。そういう訳で満瑠さん  
に教える場所は、あえて倉庫にしたし、レッスンだけに徹する事に  
した。」

安田は、そこまで一気にしゃべって、一度、ビールを1口飲み込  
んだ。

「その『修行』では、そろそろ僕にも自信がついてきて、もう、満  
瑠さんに打ち明けてもいいような気がしてきた。だから今日、満瑠  
さんを誘って告白することにしました。」

安田は、急に敬語になり、満瑠の目をまっすぐ見ていた。

満瑠も安田の目を見る。とても澄んだきれいな目だと思った。満瑠にとっては、もうとっくに諦めていた恋の筈だった。

「勿論、喜んで、お付き合いさせてください。」

満瑠は、家に帰り、ベッドに横になりながら、今日1日で起つたことを振り返ってみた。たくさんありすぎると思った。でも、色々な事はもうすっ飛ばして、安田と付き合う事になった事だけ考えようと思った。

帰り道、人気が少なくなった橋の上に来た時、安田は満瑠を強く抱きしめた。その安田の胸は、いつもダンスを教えてくださいれる時の安田とは違つたと満瑠は思った。とても温かいと思った。その時の事をもう一度思い出すと、満瑠は胸がじんとしてきた。こんな気持ちになつたのは初めてかもしれない。そしてこの気持ちは大事にしようとも思つた。

安田の前のパートナーは、実はダンス教室の受付をしている清水先生だと安田から告白された。清水先生は、レッスンの度に満瑠と会っている。そして、随分親しくもなつた。とても明るい人だから、安田が具体的にどのように清水先生の事を傷つけたのが少し気になつたが、安田も言わなかつたので、あまりこの事には触れない事にした。そんなことより、未来を考えようと満瑠は思ったのだつた。安田とのダンスレッスンは終わりになつたが、今の林田先生とのレッスンは、当分、続けるつもりでいた。今まであまり運動をした事がなかつた満瑠だが、ダンスをするようになって体力もついてきたし、姿勢も良くなつた。昔ダンス教師だった安田は、勿論満瑠がダンスを続ける事に反対はしていない。

満瑠は早速、安田と付き合う事になつた事を、杏子にメールで知らせた。

きつと杏子は喜んでくれるはずだ、と満瑠は思った。

次の日、いつもの京都風パブで満瑠と杏子は会っていた。

満瑠がメールを送った直後に、杏子から返信メールがあったのだ。

『明日会いたい。』と書いてあった。

(早速、私のオノロケでも聞きたいと思ったのかな。)

そんな風に満瑠は思っていた。

杏子は席に着くなり、すぐにビールをせわしなく注文し、早く満瑠と話をしたいような雰囲気だった。でも、どことなく表情は硬い。

「杏子、早速私の話を聞いてくれる気になった？」

満瑠の言葉もさらっと聞き流して、杏子はビールジョッキを持ち上げて、乾杯のあいさつをしていた。

「実は、今日は、満瑠に見せたいものがあるの。」

杏子の表情は、強張っているようにも見えた。

「どうしたの？ 何だか怖いな。」

「満瑠、驚かないで聞いて。……1日前にね、見田さん亡くなっていたの。」

「えっ？」

驚かないで聞ける訳がないと満瑠は思った。

「どうして？」

「事故らしい。交通事故だって。信号無視してきたトラックにはねられたそうよ。葬儀は、身内だけで行つて会社の人の会葬も辞退したらしいわ。彼もね、葬儀の後で亡くなった事を家族から知らされたそうよ。」

杏子の彼は、見田の高校時代の友人だったと満瑠は思い出した。

「見田さんの手帳に日記が書かれていて、見田さんのお母さんから私たちの事が書かれているからと、彼に見せたらしいの。」

満瑠は、見田が手帳に日記を書いていた事は知らなかった。確かに見田は、几帳面な性格だと思っていたが……。

満瑠は、見田の事を何も知らなかったのだとつくづく思い知らされる。

「手帳には、時々、数行ほど日記が書かれているの。私たちの事も

書かれているけれど、ほとんどが満瑠の事だったみたい。私は、見たら悪いと思つて見ていないけれど、彼が1通り読んで満瑠の事だと判断したから、これは、満瑠に見せなきゃと思つてお母さんから貸してもらい、私に託したわけ。」

昨日から、様々な事件が自分を襲つてきていると満瑠は思った。もう、忘れようと思つた人だが、やはり1年も付き合つた人だから、死んだという事を聞けばショックを受けるのは当然の事だった。

満瑠は、杏子から黒くて少し大きめな手帳を渡された。パラパラとめくつてみると、綺麗な字で、カレンダーになつているマスの中に文字が書かれている。これを読み始めるには勇気が必要だと満瑠は思った。

杏子に少し時間が欲しいと言い、京都風おでんを何品か注文した。胸がいっぱいで、お腹もすいていない気がしたが、今すぐにこれを読み始める勇気は湧いてこなかった。

杏子は、気の毒そうな顔で満瑠を見ていた。

「見田さんは満瑠の事をずっと愛していた。」と杏子が言っていたのを満瑠は思ひだしていた。自分を愛していた人がどんな日記を書いたのか、早く見たいという気持ちと、見たくないという気持ちが揺れ合っていた。

結局、おでんには手をつけずに、満瑠は手帳を開いて読み始めた。手帳は、今年のものだから、日記は満瑠と別れる3カ月前から始まつていた。

1月1日 晴れ

満瑠と初詣に出かけた。願い事は勿論満瑠と幸せになること。それだけ。

1月3日 曇り

満瑠は、今日も僕の胸のほくろのことを言った。初めて見つけたと言っているが、去年もそう言っていた。覚えていないのか。僕は

満瑠の身体の事は隅々までよく覚えているのに。

1月4日 晴れ

満瑠は、僕と違って大雑把だが、その事が嫌いではない。でも、つい批判してしまう。ごめん。

1月21日 曇り

満瑠は最近、僕の話聞いていない時がある。返事はしているのに覚えていない。僕は、満瑠の話は皆、覚えているのに。僕は、満瑠に対してこの日記の中だけで不満を言っただけで不満は、直接話した方がいいと思うのに、なぜか言いだせない。

1月25日 曇りのち晴れ

今日は仕事で失敗した。僕が落ち込んでいても全然満瑠は気がつかない。あんなにはしゃいで、君は随分楽しそうだね。こんな風に愚痴るくらいなら自分から満瑠に話せばいいのに、それができない自分がじれったい。

2月14日 雨

今日は、バレンタインデーだと言うのに、満瑠に平気で約束を破られた。どんな大事な約束なのだろう。満瑠が平気で破った訳でないことを願う。

2月25日 曇り

最近、僕の仕事が忙しくて会えない。でも満瑠は、平気な様子だ。満瑠に対する僕の愛情と満瑠が僕に対する愛情を比べてしまう。満瑠の心はどこにあるのだろう。僕がいなくても君は今のまま元気でいられるのかもしれない。僕は、君がいなかったらつらいのに。

2月28日 晴れ

満瑠が、僕がいなくても平気なのかどうか試してみたくなった。  
こんなことは、いけない事だろうか？

3月1日 晴れ

やっぱり満瑠の本当の気持を知りたくなつた。こんな事を実行して後悔しないだろうか？でも、満瑠の気持が知りたい。

3月2日 曇り

とうとう、実行してしまつた。満瑠はきっと僕とは別れたくないと言ってくれると信じていた。だから、思い出に残るようにとあのレストランに決めた。でも、満瑠は、行ってしまつた。満瑠の愛情はやっぱりそんなものだったのか？ 満瑠は、僕と別れたくないとは言ってくれなかつた。悲しい。

3月3日 晴れ

仕事が手につかなかつた。なぜあんな事を言ってしまったのだろう。僕も傷ついたが、大切な満瑠も傷つけてしまつた。満瑠、なぜもっと否定してくれなかつた？ 取り乱してくれなかつた？

いや、こんな事をした僕がいけないんだ。ごめんよ満瑠。僕は自分勝手だつたね。

君の事を愛しているだけでなぜ満足できなかつたんだろう？ なぜ僕への愛を疑ってしまったのだろう。僕は最低な男だ。君を愛する資格なんかない。

満瑠は、ここまで読んで、涙が出た。どんどん出てきて止まらなくなつていた。

(別れようと言つたのは、本心じゃなかつたの？。)

あの時、見田は自分を試していたのだと満瑠は、初めて気がついた。満瑠にもっと自分の気持ちをぶつけてほしかったのだと気がついた。

(なぜ私を信じてくれなかったの?)

満瑠はそう思いながらも、この日記を見て見田の気持ちが見えてきた。

(祐司さんをすっかり見ていなかった、私のせいだ。)

今の自分のダンスと同じ事をしていただけだと思っただ。

(こんなに私を愛してくれていた事になぜ気付かなかったのだろうか? こんなに苦しんでいた事になぜ気付かなかったのだろうか?)

「ごめんなさい、祐司さん。」

手帳を抱きしめて謝る満瑠に、杏子は、何と言っていいかわからなかった。

「祐司さんは、事故だったのよね。自殺なんかじゃないのよね。」

満瑠の言葉に杏子は驚いた。

「そうよ、事故よ。何を言っているの?」

杏子は、満瑠の隣に座り、満瑠の肩をぎゅっと抱いた。

満瑠は、杏子にもこの手帳を読んでもらいたかった。自分がどんなに見田に謝りたいと思っているか、杏子にも知ってもらいたかったので、手帳を渡した。

杏子が日記をみている間、満瑠は黙々とおでんを口に運んでいた。満瑠と別れた後の日記には、逸見と杏子を祝福する言葉や仕事で辛い事などが書かれていたが、満瑠の事はその後、たった1行しか書かれていなかった。

11月12日 晴れ

山中湖へ行った。満瑠、ごめん。幸せになってくれ。

見田の死が、本当に自殺でなかった事を満瑠は信じたかった。

満瑠は、安田としばらく会いたくなかった。このままの気持ちのまま会うのは嫌だった。

見田の日記の最後は、11月12日だった。この日、見田は山中湖に行ったと書いている。



満瑠は、自分もそこへ行ってみたくなくなった。見田が最後に見た冬景色を見てみたくなったのだ。もう、見田とは行く事ができない冬景色を……。

満瑠は山中湖には、杏子といっしょに行く事になった。杏子は、手帳を読んで見田の気持を知ったら満瑠の事が心配になったらしい。まさか、見田の後を追うとは思っていないだろうが、「1人では心配だから。」と杏子は言ってくれた。最初は1人で行こうと思っていた満瑠だが、杏子が一緒に行ってくれるのは、正直、心強かった。

12月17日、杏子は自分の車を出してくれた。見田の日記では、山中湖のどの辺りを走ったのかなどは分からない。多分、富士山を撮影しようとしていたのだと思い、富士山がよく見える辺りまで杏子は車を走らせてくれる事になった。満瑠は、見田が富士山の雪景色を今度撮りたいと言っていたのを思い出したのだ。

この日は、日記の日と同じで晴天だった。麓まで白く雪で覆われた富士山がくつきりと見えていた。見田が最後に見た富士山は、どんなだっただろうか。満瑠は思った。

満瑠は最近、写真を撮っていない。見田と撮影に出かける事がなくなっただし、ダンスに興味が移ってしまっていたからだ。

満瑠は、久しぶりに一眼レフのカメラを持参した。車を止めると三脚を立てて、ファインダーを覗いた。

(こんな時、祐司さんはあれこれ、うるさいくらいにアドバイスしてくれたな。)

彼は、本当にやさしかったと満瑠は、しみじみと見田の事を思い出していた。

「こんなきれいな富士山、祐司さんに見せてあげたかった。」

満瑠は、杏子にも聞こえる声でつぶやいた。

杏子は、黙って富士山の方を向きながら頷いた。

「杏子、私が祐司さんと別れた事を話した時、杏子は分かっていた

んじゃない？ 彼が私を試していたかもしれないって。」

「どうして？」

「杏子は、いつも私の気持ちを心で感じてくれている。そう思うから。もしかしたら祐司さんの気持ちも分かっていたかもしれないと思った。相談した時、杏子は『どうして取り乱さなかったのか』って私に聞いたよね。」

「実は、そうかもしれないと少しだけ思っていた。もし私があの時満瑠にそう言っていたら、満瑠は祐司さんと別れなかったかもしれないね。」

「ううん。」

満瑠は、否定した。違うと思った。

「そういう運命だったんだと思う。祐司さんが日記で言っていた通り、私は彼の事をうわべだけでしか見ていなかったって今やっとわかった。結婚するっていう事がどんな事なのか何もわかっていなかった。祐司さんは私には勿体ない人。」

満瑠は、澄んだ空気の中で自分の心も洗われた気がしてきた。

「満瑠、なんだか成長したね。」

「成長って、大人になったっていう事？」

「そう、振られるっていう経験もしたしね。」

「杏子は、やっぱり大人だね。そうやっていつも人の事、冷静に見ている。そして気遣ってくれる。きつといい奥さんになれるよ。」

満瑠は、富士山をバックにカメラを向けて、

「記念に二人で撮ろう。」と杏子を誘った。

セルフタイマーで二人は笑顔で写真を撮り、たった2枚撮影しただけで、満瑠はカメラを片付けた。

「私は、これからだわ。ダンスを習って誠治さんと出会って、少しは変わった気もするけれど、もっと成長しなきゃ。」

満瑠は少し大きな声で自分に言い聞かせるように言った。

「そうそう、もう安田さんとは、間違えちゃダメよ。ちゃんと心で感じて、二人で愛を育ててね。」

「わかつている。彼の事は大事にしたい。今度は誠治さんと色々な思い出を作るわ。」

3月になった。

満瑠は、懐かしいあの木製のドアを押し中に入った。ここは、1年前に見田に振られたショックから立ち直ろうとして「修行」のために入った、恵比寿にあるフレンチレストランだ。

「丁度1年になるのね。」

満瑠は、隣にいる安田につぶやくように言った。1年前と違うのは、二人が「修行」のために入るのではないという事だ。今日はきちんと二人で予約している。

入口で迎えてくれた店員は、見覚えのある顔だった。そう、あの時の清楚な店員だ。満瑠はこの店員に「私、振られちゃったんです。だから、今日から変わりたいと思って。」と言った事を思い出し、ぷつと吹き出しそうになった。

(この人、覚えているかな? あの時の私を。)

この清楚な店員は何食わぬ顔で二人を迎え、窓際の席に案内した。満面の笑顔もあの時と一緒だった。

案内された席を見て、思わず二人で顔を見合わせてしまった。1年前と席まで一緒だった。

「これは、あの店員の粋な計らいかもしれないな。」

安田は満瑠に目配せをしながら言った。

満瑠は富士山を杏子と見に行つた後、新たな気持ちで安田と付き合い合ふ事を決めた。それからこの3カ月は、頻繁に安田と会っていた。安田が満瑠の事をとて大事に思ってくれるのを満瑠は強く感じていた。満瑠はそんな彼をいとおしく思い、この愛を育てて行こうと思っていた。

今日は、二人が出会ってから1年経つた事を記念して、もう一度このレストランへ来て、今度は最初からコース料理を「二人で」楽しもうと言う事になったのだ。

二人は席に付くと、迷わずあの時のコース料理を注文した。

「何だかわくわくするね。」

満瑠はもうすでに興奮していた。

食前酒に、満瑠は迷わずあの時に頼んだスパークリングワインを注文した。

「1年前を再現するつもり？」

安田は笑いながら言った。

「そうじゃないの？」

「それもいいけど、今日、新しい思い出を作るのもいいんじゃない？」

満瑠は安田と一緒になら、どんな事でもいい思い出になると思った。前菜から始まり、料理が静かに運ばれてくる。1年前と違う食材を使った新たな芸術作品に出会えたと満瑠は思った。

メインディッシュを食べ終えた後、店員が少し大きなお皿を抱えてやってきた。

「デザートね。」

満瑠は、小さなケーキやお菓子が皿からのぞくのを、わくわくして待った。

しかし店員がテーブルに置いたものは、ハートの形をした少し大きなケーキだった。ろうそくが乗っていて、『祝 修行1周年』と書いてあるではないか。

満瑠は思わず安田を見た。

「誠治さんの作業ね。」

安田はおかしさをこらえるように言った。

「実は、1周年記念だからケーキを用意してくれるよう頼んでおいたんだ。サプライズさ。でも、『修行』なんて言っていないよ。全く、どこまで気が利いているんだか。」

店員は、素知らぬ顔で給仕を続けている。

「ここ、最高だわ。新しい思い出ができちゃった。」

満瑠は、安田と二人でろうそくを吹き消し、記念写真も撮っても

らった。

「もう絶対に一人でコース料理を食べたりはしたくないよ。」

安田はしみじみと言った。

「私も。絶対に。」

レストランを出て、二人でゆっくり恵比寿の静かな町を散歩した。  
「私、もうダンスを止める事にしたの。」

安田は、満瑠の言葉に少しびっくりした。

「何で？ 身体の調子も良くなったって言っていたし、続けたいじゃない。」

「いいのよ。あれからワルツをがんばって練習したの。踊りたいと思うくらいまで踊れるようになったからもう満足。踊りたかったら誠治さんと踊ればいい。もう、ダンスの『修行』も終わりにするわ。ダンスのお陰で私は失恋の痛手から立ち直れたし、新しい出会いもあった。だからもう必要無くなったの。」

満瑠がそう言った時、ふわっ、と強い香りを感じた。

（あっ、沈丁花。）

懐かしい香りだと満瑠は思った。

（祐司さんと出会った日もこの花が咲いていた。）

見田の事を思い出してしまった。見田と別れてからも丁度1年経っていたのだ。

「これ沈丁花よ。いい香り。」

「ほんとだ、いい香り。」

安田も気づいて大きく息を吸った。

「この香りは、誠治さんとの思い出にするわ。」  
声を出して安田を見たが、彼はきよんとした顔で満瑠を見ていた。

## 完結編（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6955s/>

---

沈丁花

2011年4月24日00時55分発行